此武勇傳に送別會は變なものになり亂席に終りを告げたが、加瀬將軍のかうした蠻行に出たのは、同將軍が推薦して豐橋市長にした細谷忠男に就いて市政界黨爭の餘波、大口の市長苛しといふ樣な事もあり、將軍は平素不快を感じて居た所へ、大口が將軍を自宅に訪問した際將軍の市政批判に對し大口が將軍は兵馬の智將ではあるが、自治政に就いては素人だ云々の語を以て酬ひた談話が新聞に出たとか言ふので憤慨して居た、其感情が酒の上で發露したもので全くそうした感情問題である。翌日新山少將、岩下判事、矢崎院長三人が調停を試みると加瀬は泥醉して記憶は無いが、毆つたなら陳謝すると言ひ、大口は眞個誠意を披瀝して自治政に關し反省するなら考慮すると主張した。岩下は判事として自治政に立入ることは出來ぬと仲裁の手を引き、結局歸京した加瀬を相手取り大口は高木益太郎辯護士を訴訟代理人として東京區裁判所檢事局へ告訴した。加瀬は之が對策として豐橋に到り辯護士鈴木五六をして大口及び大口對加瀬談を紙上に掲載し、將軍を誹したと言ふ事由で豐橋區裁判所に告訴し事件は紛糾を重ねたが、双方の辯護士の調停的妥協に依り相互告訴を取下げ事濟みとなつた。

第十三回總選擧

第十三回總選擧は大正六年四月二十日を以て施行された。上記の樣な小供じみた事件の爲め一週間ばかり邪魔をされた大口派は國民黨本部派遣の清水銀造、豐橋聯合青年副會長山本市郎と共に北設樂郡田口の伊藤六山、田嶺の竹下角次郎、名倉の伊藤正松等を斡旋者として遊說を試み地盤開拓を爲した關係に依り山本市郎等の青年辯士を率ひて進出し、大場恒次郎、小山信は寶飯渥美八名南設に亘り喜六と共に躍動し、八名郡は三浦碧水鈴木麟三時代より同派の堅壘であり、近藤源太郎、菅沼市五郎、安形熊五郎、建部健次郎等中堅となりて大口事務所を開始し、渥美郡二川は福谷元治の事業關係から金田虎吉活動し、志津の中西重平、高師の淺野權平等有力者の應援せるあり田原町童浦の如きは全村擧つて大口派の觀を爲し聲勢大に振ふ。

小林仲次のベテン立

寶飯郡前代議士小林仲次は大口が立候補した以上、地方代表の適材であるから自分出馬の要無しと、長男重次をして大口に通告せしめたので、大口は之を信じて仲次の出馬は夢想だにせず頻りに仲次崛起を傳へても大口は極力否定して居たが、數日後には寶飯郡有權者有志の推薦で小林仲次立候補の事實が明確になり、大口に取つては青天の霹靂であつた。加之、旭興產銀行休業整理に關與した辯護士加藤增次郎が詐欺恐喝の被疑として岡崎未決監に拘禁中、立候補を宣したので小林派は勢ひ豐橋八名、渥美、南設に進出すべき趨勢となつた。

小林の出馬はベテン立だと傳へられて居たが、實際は小林に立意無く唯憲政會愛知支部の常任幹事近藤岩吉が獨り大口が國民黨に留まり、憲政會に來らざることを不快とし大口叩き落しの爲めに小林の立候補を策し、有志推薦の形式を取つたもので加藤總裁は小林の爲めに國府町霞座で應援演說を試みたが、小林は顏出しもせず東京熱海等へ逃竄して居た。或は此形式に依り消極的選擧運動を試みたものか其邊は勿論不明であつた。

東三に於て政友派の候補者は無く近藤壽市郎、山內元平等は政友會候補大島久滿次を援すべく田原萱町に選擧事務所を設け渥美半島全線に亘つて活動を開始した。尤も元平の妻女は永井松右衞門の娘で大島の姪に當つて居る姻戚關係でもあつた。政友會本部から元田肇が應援演說の爲め出張し、田原、福江、伊良湖方面各地で演說會を開き聲援を與へた。此時元田は渡邊華山の遺跡をたづね詩あり。

遊說途次過巴江弔華山　關東一片冊心期報國。
孤忠不徹事堪憐　獨拂桑麻弔古賢。
春風吹盡巴江晚

又辯護士鈴木五六は豐橋の自宅を選擧事務所として清水市太郎の爲めに、深井正憲、岩瀨彌平等は上傳馬に事務所を設けて小山溫の爲めに運動に努力した。政友派は土地に候補者無き爲め思ひ〳〵に同派の候補者の援助を爲したが其間に協調を保つて同志打を避けて居た。

小山溫

法學博士小山溫は碧海郡刈谷町大字小山の人、判事小山藏太郎の長男慶應元年八月二十八日の出生此時五十四歳、明治二十三年東大法科英法科を優秀の成績で卒業した秀才で、平沼驥一郎、鈴木喜三郎と同期の卒業生である。在學中同學の佐藤勤也淺若猪三郎、宇都宮俊治、高橋貞碩、都築廣治並に慶應の青木耕作等と共に三河鄕友會を起し、三河學生の鼓舞作興に力め卒業後は東京地方裁判所東京控訴院、大審院判事より檢事に轉じ、司法省監獄局長、刑事局長等を歷任し後に司法次官、錦維間祇候仰付けられた閲歷の持主である。

田中善立は南設新城の一角に牢固な地盤を占據し居るので前田元治郎一派が此堅壘を守つて猛運動を開始し、尾崎學堂を招聘して新城富貴座に演說會を開いて氣勢を昂げた。之に對し同町の池田李三郎一派は鈴木屋旅館に事務所を設けて三輪市太郎の爲めに城所一郎金澤房吉と共に戰線を張り設樂八名兩郡に奇襲戰を試みた。

武富濟

武富濟は碧海郡刈谷町字熊安養寺三浦長音の娘華を母とし、明治十二年四月二十三日生れ、此時二十九歳、三十七年東大獨法科卒業東京地方裁判所檢事として、日糖事件幸酒秋水事件の係檢事として名聲を博し退官して辯護士となり、憲政會候補として始めて名乘りを揭げたのであるが、東三に於ては多年政友派の熱心なる闘士として知られて居た八名郡三上の赤川要助が藤田健次との關係上、憲政會に轉籍したのを奇貨とし、武富派の懇願に應じ參陽新報社長久野笹吉と共に武富の爲めに八名渥美二郡を分擔して更に寶飯郡に侵入し、各地に演說會を開き言論戰と共に露骨な實彈射擊を行つたので、南設樂郡縣會議員望月喜平治、碧海郡縣會議員磯部榮吾、寶飯郡有力者白井九一郎、並に前記赤川要助は一度選擧違反として檢擧せられ、名古屋區裁判所檢事伊藤楯雄の取調を受け、伊藤檢事は更に進んで久能雀吉を取調ぶべく準備を進めたが、偶々同檢事急性盲腸炎に罹り國府町に於て急死したので久能は取調べを免がれ一段落と爲つた。

三浦逸平亦例に依り山田七平に依り東三に侵入した。

西三河では岡崎の手嶋檢司が憲政會候補として出馬した鍬司は八丁味噌本舗の番頭で代議士候補に推薦さるゝまでの手腕力量を有した人物である。碧海郡の早川龍介、小山溫、武富濟、三浦逸平、西加茂の福岡精一の六人併立は西三としては山盛であり、それに尾張郡の清水市太郎田中善立鈴置、倉次郎三輪市太郎、大島久滿次の侵入軍あり亂闘混戰を極めたが政友會本部は各候補に對する應援軍として、山本達雄、高橋是清、元田肇、奥野市次郎、杉田定一の諸豪大物巻を並べて豐橋、田原、岡崎各所で大演說會を開いたことは同派空前の盛觀であつた。開票の結果憲政派の巨頭早川龍介、武富濟、小林仲次、手島鍬司三浦逸平が枕を並べて打死したことは是亦空前の落選振りで政府黨ならざるものゝ悲慘の光景が如實に現示せられたものゝ從來何時も政府黨であつた早川等の當落が一に之に依つたことも思はれた。開票の結果成績左の如し。

愛知縣定員十三名

名古屋市　二名

當　小山松壽　（憲政）　（二、七三四）

當　磯貝　浩　（憲政）　（一、九三〇）
次　加藤重三郎　（政友）　（一一二一）
　　江口理三郎　　（八五四）
　　加藤秀一　　（六五一）

郡部十一名

當　瀧　正雄　（政友）　（四、四三一）
當　清水市太郎　（政友）　（三、八〇一）
當　三輪市太郎　（政友）　（三、七一七）
當　小山　溫　（政友）　（三、四八一）
當　大口喜六　（國民）　（三、四〇三）
當　奥村三樹之助　（政友）　（三、三五一）
當　日比野　寛　（憲政）　（三、三一三）
當　田中善立　（憲政）　（三、〇一九）
當　堀尾茂助　（政友）　（二、九三二）
當　大島久滿次　（政友）　（二、七八七）
當　鈴置倉次郎　（憲政）　（二、七六二）
次　手島鍾司　（憲政）　（二、七五四）
　　森田小六郎　（憲政）　（二、一四一）

武富　濟　（憲政）　（二、七三〇）
早川龍介　（憲政）　（二、四六六）
鈴木岩次郎　（憲政）　（一、八二九）
三浦逸平　（憲政）　（一、八一〇）
福岡精一　（政友）　（一、七三四）
小林仲次　（憲政）　（一、五一一）
加藤增次郎　（政友）　（九七二）

瀧　正　雄

尾張中島郡出身の瀧正雄京大助教授の地位を棄て同大學各教授連名の推薦狀を折紙として始めて代議士選擧に出馬し第一位最高點を以て當選し少なからず異彩を放つたが、其人格と學歷とは直ちに床次竹次郎の買ふ所となり、秘書の立場に在つて進退を共にするに當り後年近衞内閣の出現に當つて近衞首相學生時代の師と言ふ關係もあり、企劃院總裁の榮職に就くに至つたが政友會に於ける瀧代議士の存在は山岳重疊裡の一清流の如き觀を爲して居た。

選擧の結果議會に於ける議席は一變した。第三十八議會解散と同時に公正會は解散し、新選議員及び前公正會員前無所屬議員は相合して維新會を組織した。大正六年六月二十三日開會七月十四日閉會の第三十九議會に於ける議員所屬は左の通りであつた。

立憲政友會　百六十名
憲政會　百十九名

立憲國民黨	三十五名
維新會	四十二名
無所屬	二十五名

外交調査會委員に原敬も犬養毅もなつて居る關係上、政友國民兩黨は公然寺内内閣を支持することゝなり、政府與黨は二百三十七名の絶對多數に達し憲政會が後藤内相彈劾案や外交調査會詰問案を出したが、勿論問題にならなかつた。唯少數派の戰線として彌次を飛ばして議場を攪亂するに過ぎなかつた。

第四十議會は大正六年十二月二十七日開會七年三月二十六日閉會したが維新會の全部及無所屬の半數合して新政會を組織したが間も、無く新政會の約半數退會して清和倶樂部を組織した。

補缺選擧

傳祿と宇吉

大正七年四月二十七日愛知縣代議士大島久滿次病死の爲め其補缺選擧が同年五月十八日執行された。

憲政會候補内藤傳祿、政友會は大島宇吉であつた。知多郡の素封家尾三銀行頭取の内藤と新愛知社長の大島と閲歴から見れば、てんで地位の違つた角力であるが、其しみつたれた角逐振りに於て蓋し好箇の取組で有つたらう。

前總選擧に巨頭枕を並べて慘敗の憲政會は此補缺に全力を注いだことは言ふまでも無く、五月二日には名古屋に憲政會、東海士州會を開いて先以て狼火を揚げ、宇吉派の新愛知に依る宣傳戰に對し傳祿派は尾三銀行の關係を廻りて戰線を敷いた。

宇吉派の言論戰鬪士は井上角五郎、小久保喜七、山崎勳、佐々木文一、土屋清三郎、赤尾彦作、山口熊野、奥繁三郎、三上正毅の面々で關西下りの岡崎邦輔、菅原傳、中村啓次郎も亦立寄り聲援を與へた。一方傳祿派は尾崎學堂、濱口雄幸、靜岡民友の森田勇次郎、名古屋新聞社長小山松壽の顔觸れ、一方が巡洋艦の數を擧げてに對し一方は戰鬪艦を繰出して對抗と言つた形ちで、戰鬪部隊としては宇吉派は西三河に於ては福岡精一、後藤文一郎を始め高橋源吉、岡田菊次郎、黒須助三郎、傳祿派は早川龍介、太田善四郎、近藤重郎、原震外、岡田撫琴、東三河に於ては宇吉派は近藤壽市郎、吉原祐太郎、鈴木五六、山内元平、磯田伊三郎、榊原辨吾、池田杢三郎、今泉辰三郎、後藤庄五郎、中村猪三郎、佐久間源太郎等、傳祿派は高橋小十郎、野村重兵衛、白井九一郎、杉浦兵吉、望月喜平治、青木百本、中村辰藏等活動し、到處に航々相摩するの觀があり。豐橋の傳祿派が其肖像入り宣傳ビラを新聞に挿入せんとしたのを賣捌店主佐久間源太郎が拒絶したに對し憤慨した高橋小十郎、大場恒次郎、小山信等は一夜の中に資本金五萬圓の株式會社新聞賣捌店公益社を設立し、社長に原田万久、常務に大場恒次郎を据へたなど慌はて切つた押話もあり、何處か浮は調子であつた此選擧は結極投資額の差に依つて當落が決した觀があり。傳祿の二萬八百八十一票に對し宇吉は一萬九千七百七十一票といふ一千一百十一票の差を示したことは少なからず新愛知社長の估券を下げた譯で政友派を失望せしめた。

内外情勢と寺内内閣

當時内外の趨勢は歐洲大戰の波動を受けて波瀾曲折期に入り、日本は萬一獨逸が勝を制し東洋に殺到する時の準備として支那政府と軍事協定を爲し、揚子江を國防第一線として漢口に軍隊を駐屯せしめた。當時袁世凱の死後段祺瑞政府であつた。大正六年五月二十四日三浦梧樓は國際情勢に顧みて片肌脱ぎ、政友會總裁原敬、憲政會總裁加藤高明、國民黨總裁犬養毅の三黨首に會見を求めて、外交多事なるの時に際し内爭是れ事とするは國勢進展と憂ふべきことであるとて、對支親善、國防充實、外、交刷新に就いて協力一致を求めた。其結果外交調査會を設立することゝなつたが加藤高明は屋上屋を架するものなりとて

外交調査委員たることを拒絶した。之は寺内に對する對立關係もあり之が爲め無條件に政府與黨となることを欲しない立場に在つたからである。其處で外調は調査委員として

本野外相、後藤内相、加藤友三郎海相、大島健陸相、原政友、犬養國民、伊東巳代治、平田東助を網羅し、加藤憲政は孤立の立場となつた。

で外交情勢はと見ると、明治四十一年十一月三十日支那問題に就いて日本は重大な關係を有し、米國亦同樣の立場に在つたので高平駐米公使と國務卿ルートの間に文書を交換し、相互紛爭を廻避するの意向を示したが、大正六年六月に至り石井菊次郎を特派全權大使として派遣しランシングと接衝し、所謂石井ランシング條約なるものを締結した。

一、太平洋方面に於ける日米兩國商業の自由平穩なる發達を契勵する。

二、支那に於ける商工業は機會均等主義なること。

三、從つて前記方面に於ける各自の所領を尊重する。

四、和平手段に依り支那の獨立及領土保全を支持する。

五、前記の事項を侵迫する事件發生する時は兩國政府は共有益と認むる措置に關して協商を遂げんが爲め互に意見を交換すること。

之で日米兩國は對支問題と太平洋問題を解決したものと見做して居た。

露國には歐洲大戰の結果革命が起り赤色國家に全然塗り替へられた。我國に於ては大戰の影響として未だ曾て無き巨額の正貨保有者となり、大戰景氣はインフレを起し物價昂騰勤勞階級を脅威すること甚だしく一升十六、七錢の米價は五十錢に暴騰し政府は暴利取締令を發布し奸商を取締つたが、米穀不足外米輸入に關し外米貿易商の買溜めを矯制するの道無く其暴擧に任かすの外無き情勢に在つて管理統制の効果は無かつた。

政黨方面に於ては大正六年十月十五日維新會四十二名、無所屬十二名が合して新正會を組織し、秋田清、木下謙次郎等牛耳を執つたが間も無く脱會者、が出來、若尾彰八、越山太刀三郎等二十八名が清和倶樂部を組織し、政友會百六十四名、國民黨三十六名、新政會二十六名、清和倶樂部二十八名、憲政會百十八名、政府與黨は大多數であつた。

露國の革命軍は獨墺と和睦し赤化勢力は次第に東漸しチエコ・スロバキヤア軍は露國と同一民族である關係上、露軍と戰ふことを欲せず露軍に投降したのであつたが、此等の浮虜は反過激派軍で有るので、西伯利在在のものは過激派軍と激戰を交ゆるに至つたが、歸路を遮斷せられて西伯利に立往生するに至つた。

日支兩國は防共の必要から大正七年三月より交渉を開始し九月六日

一、日本軍は支那國内に駐屯し又は通過の自由を有すること。

二、前記有効期間は媾和條約が日支兩國の批準を了し敵國が支那國境より撤退するか又は聯合軍の陸海軍が露領より撤退を時期とすること。

の條約を締結した。

其年七月二日米國はチエコ・スロバアキヤア軍を救援すべく聯合軍の出兵を提唱し、我國へも贊成を求め來り、茲に西伯利出兵問題が擡頭し、山縣有朋、尾崎行雄は反對であつたが後山縣は出兵説に聽從し大正七年八月第十二師團と第三師團後に兩滿駐屯軍を出動せしめた。

同七年九月山東問題に就いて青島還附の覺書を支那政府に交附し、日本軍は濟南に駐屯するの外全部青島に集結することゝなつた。

斯かる場合大正七年八月六日富山縣滑川町の女共が騷ぎ出し、米穀商を襲擊したのが動機となり、京都、神戸、名古屋、豐橋、東京と所在勃發し、豐橋では八月十三日の午後七時頃豐橋驛前で一壯漢が大道演説を始め宣動したのに端を發し、數百の

群衆雪崩を打つて豐橋米穀所理事長中林登平商店に亂入し亂暴狼籍を極め、石油を注ぎ放火せんとしたが隣人の懇請でやつと中止し、在米全部一升二十三錢にて賣ることを約し喚聲を揚げて引揚げ他に轉じ、數軒の米穀商を襲擊したので第十五師團長久邇宮殿下は參謀長山田軍太郎大佐に命じ、軍隊を出し鎭撫せしむるなど大袈裟の事となり東京に於ても軍隊の出動を見るに至り　天皇陛下には深く宸襟を惱ませられ、御內帑金三百萬圓を御下賜細民救助に充てさせ給ひ、政府は一千萬圓の豫備金支出を爲し救助策を講じたが、首相寺內正毅は恐懼し閣僚と共に總辭職を爲した。

原內閣の成立

寺內內閣の瓦解により元老會議は九月二十二日開かれ、山縣有朋、松方正義、大隈重信、西園寺翁出席、他元老は西園寺の出盧を促がしたが西園寺は固辭し政友會總裁原敬を推薦したので、之に決定し內閣組織の大命は原敬に降下し、原內閣は大正七年九月二十七日成立、我が國に於ける最初の平民內閣で陸海兩大臣を除くの外全部政友會員を以て閣員とした。

其年十一月十一日歐洲大戰の休戰條約が締結され、直に佛蘭西ヴェルサイユ宮に於て平和會議を開くことゝなつた。我國は西園寺公望を講和全權大使として、牧野伸顯及び駐英大使珍田捨己、駐佛大使松井慶四郎を副使として特派した。諸外國は首相外相が出席したが、米國はウイルソン大統領自から出席した。會議の大體は日英米佛此の五大國で協議決定した後、他の小國に協議したもので平和條約は大正八年六月二十四日成立調印を了し、我が西園寺全權大使は八月末に歸朝した。

平和條約は第一論國際聯盟から勞働問題第十四論に亘る廣汎のもので、國際聯盟は米國大統領の提案で三十一ヶ國の戰爭防止規約であるが、米國は上院で批準を拒否したので米國は參加が出來ず、如何に國柄とは言へ提案者自體の參加が出來ないなどウイルソン大統領の面目丸潰れで、我が國なら當然腹切ものであつた。我が國の得た收獲は左記の三項で西園寺全權提案の人種の差別待遇撤廢案は通過しなかつた。

（一）支那青島に於て獨逸が有した總ての權利を日本が繼承すること。

（二）マリアナ群島、マーシヤルカロリン兩群島の北部の統治權を日本に委託すること。

（三）軍艦三隻、潛水艦三隻及び商船數隻を日本に引渡すこと。

單に是だけで歐洲大戰參加の報酬は頗る微少で少なからず國民を失望せしめた。

此平和會議の結果勞働問題が擡頭して我國にも波及し勞資問題、デモクラシー熱が高潮し階級打破が喧しく論議され、勞資對立化の情勢を馴致したが、我が日本帝國の勢力伸展を恐るゝ英國はソ米と共に我帝國の鞏固なる國家主義的團結と美風を打破潰滅せしめんが爲め、勞働問題や思想問題に關する書籍並に注入を策し、更に思想壞亂を圖る爲め風俗壞亂の書籍輸入、カフエー其他思想頽廢の誘導機關の勃興を策したなど驚るくべき國際的惡計劃を實行したことは此當時より種々繼續したのであるが、戰後の好景氣に乘じ何も知らずに浮かれて居たことは眞に恐るべき惡魔の世界であつた。更に人口增加率を阻止すべく產兒制限思想まで注入するに至つて隨分念入りの惡戲で大局上の裏面にはユダヤ人の絲を引ける世界的破壞計畫すら潛入し居たことは何人も當時は氣づかなかつたのである。

普選の擡頭と政界

此形勢の溫床の上に俄然勃興したのは普選論で、時代の風潮に乘れる新しがり屋、雷同主義者人權論者の外に尾崎咢堂の如き思想爆破の安全辯として普選を斷行すべしといふ達觀的政策論もあり、抑も我が國に於て始めて普選案を議會に提出したるは第十六議會、明治三十五年二月十六日、中村彌六、花井卓藏、河野廣中、降棋元太郎の提出、望月圭介、根本正、濱名信平等定規の贊成を得て提案したので言はゞ各派合同の提出案であつたが、理想論として否決され、其後明治三十八年、三十九年四十年、四十二年、四十三年と連年提出され、四十四年の第二十七議會の如きは大多數を以て衆議院を通過し貴族院に於て否

決され爾來火の消へた樣になり、大正七年頃から又々擡頭し始めたもので、歷史としては隨分年代と運動を重ねて居るが愈々本格化したのは大正八年で二月十一日憲法發布記念日に帝都各大學の學生三千人日比谷公園に會合し一大示威運動を行ひ、丁年以上の男子に選擧權を與へよといふ請願書を第四十一議會の衆議院に提出したのが普選に關する國民運動の火蓋を切つたものである。第四十二議會開會に際し普選の要求は院の內外を問はず自然化したが、其機を外づさず躍り出したのは國民黨の犬養毅で、國民黨は大正八年十二月二十日開會第四十二議會の劈頭突如として「滿二十歲以上の男子に選擧權を與ふべし」といふ案を提出した。

憲政會も加藤總裁の異議と黨議とを取纏めて「二十五歲以上の男子獨立の生計を爲す者」といふに決し、他に普選實行會の三提案が有り、全國普選聯合會、國民大會、日比谷の大會には五萬の民衆が會合するに至り、全國に至り燎原の火の如く普選熱は燃へ揚がつた。大正九年二月二十六日の議會に普選案は議題に上つた。院內實行派提案は撤回、國民黨案は否決、殘る憲政會案であつたが、原首相は社會組織の變革を來す恐れありと眞向から反對し、

「選擧法は昨年改正したばかりで、まだ一度も實施しないのに又復改正といふは朝令暮改も甚だし、之法府の威信にも關す、時勢に應じ選擧權は擴張すべきも急進は戒しむべきである」

とて斷乎として反對を表明し、小川平吉が反對演說を爲し未だ採決に入らざるに議會は解散となつた。普選案を否決するに充分な頭數を有しながら、原敬首相が何故に解散したかといふに、前年改正した小選區制に依り絕對多數を得べき見込が政友會に確然あつたからである。政府の解散理由に曰く。

解散理由

「衆議院議員選擧權擴張ハ從來政府ノ採リ來リシ方針ニシテ明治三十三年之ヲ擴張シ昨年又重ネテ之ガ擴張ヲ爲シタリ。今後モ尙國情ノ如何ニ顧リミ漸次適當ノ擴張ヲ爲スニ至ルベシト雖モ、昨年以來未ダ一年ナラズ、且一回モ之ヲ實行セザルニ今又憲法附屬ノ法典タル選擧法ノ改正ヲ試ミントスルハ立法ノ威信ヲ損スルノミナラズ、國民ノ信賴ヲ全フシ、憲法政治ノ健全ナル發達ヲ促ガス所以ニ非ラザルナリ。加之今回ノ衆議院ニ提出セラレタ改正案ハ輕躁急激深ク帝國ノ國情ニ鑑ミザル法案ニシテ而カモ其理由トスル所ハ現在ノ社會組織ヲ脅威スルガ如キ不穩ナル思想ノ潛在スルヲ見ル。事此ニ在リテハ單純ナル選擧權擴張ノ問題タルニ止マラズ、國家ノ前途ニ對シ容易ナラザル影響ヲ及ボスモノト認メザルヲ得ズ。衆議院ニ於テハ本案ノ否決ヲ見ルハ疑ハザリシト雖モ事態重大ナルコト上述ノ如クナルニ依リ、政府ハ衆議院ノ解散ヲ奏請シ以テ國民ノ公正ナル判斷ニ訴フルノ已ムヲ得ザルニ至レリ

第十四會總選擧

解散に伴ふ總選擧は大正九年五月十日施行された。選擧は第四十一議會に於て改正され大正八年五月法律第六十號を以て公布された改正選擧法に依つたが、其改正點は

△小選擧區制（舊制大選擧區制）

△選擧人納稅資格三圓以上（舊制十圓以上）

△一區一名を原則とし議員總數四百六十四名（舊制三百八十一名

愛知縣は定員十三名を十七名に增加し、

第一區名古屋市三名。第二區豐橋市一名。第三區岡崎市一名。第四區愛知、西春日井一名。第五區東春日井一名。第六區丹羽、葉栗一名。第七區中島一名。第八區海部一名。第九區知多一名。第十區碧海一名。第十一區幡豆、額田、東、西加茂一名。第十二區寶飯、南、北設樂一名。第十三區渥美、八名一名。

となつた。大選擧區制に對し非常の變化である。

東三選擧界

第二區豐橋は今次獨立の選擧區となつた。大正九年二月廿六日議會が解散となるや、大口喜六は翌二十七日急遽歸豐し、同日高橋小十郎を訪問し、

「解散後の選擧は前代議士を推薦することが、憲政の常道である。加ふるに豐橋は自分が市制を施行せしめた譯であるから、其豐橋が獨立選擧區となつた以上初代代議士に自分が成ることは承知して貰ひたい。僕は立候補するから何分宜しく賴む」

と申込んだ。之に對して高橋は妙な感じを懷ひた。といふは大正六年四月大口の參謀長として高橋が働ひた時、次の選擧には自身立候補を期し二人の間に默約があつたからである。さりとて反對の表示も出來ず御座なりの挨拶をして居た。大口は無論贊成を得たものと即斷し直ちに參陽、新朝報、豐橋日々の三新聞に通話し有力者を歷訪して立候補の發表を爲し本町に選擧事務所を設けて大場恒次郎を參謀として選擧運動の店開きを爲し、二十八日の朝刊には豐橋三新聞の外新愛知、名古屋の各新聞はいづれも大口の出馬を報道した。之を見た高橋の家の子郎黨内藤太郎吉、金田虎吉が抗議を持込み前約の履行として高橋小十郎の立候補を承認すべく申し出た。併し大口の立候補申込みに對し高橋は承認したと大口は主張する、高橋は否認する、併し高橋にして果して當選の見込ありや否やといふ實際問題として檢討し樣と言ふことになり、大口派から大場恒次郎、小山信高橋派から内藤太郎吉、金田虎吉の四人が憲政會愛知支部に到り常任幹事近藤岩吉と協議した結果、高橋では勝算無しと決し大口の立候補を承認することゝなつた。

政友派では反對黨の巨頭大口を倒し一擧にして非政友の地盤を紛糜すべしと三輪市太郎態々出張し、近藤壽市郎其他幹部と

協議の上榊原辨吾を擁立し鈴木五六を參謀として豐橋驛前に選擧事務所を設け、遠藤安太郎を盟主とせる實業團の幹部を集め猛烈なる運動を開始した。

獨立選擧區としての豐橋は地域が狹隘の爲め其競爭は激烈で晝間は各戸別運動、夜は演說會の濫開で隅々でも小刻みに開會し代議士選擧は一變して市會議員選擧の觀を爲すに至つたのは小選擧制の結果である。三月三十日國民黨總理犬養毅は大口の爲め豐橋に到り東雲座と豐橋座の二ヶ所で政見發表演說を用ひて氣勢を揚げ、政友派は五月五日文部大臣政友會總務中橋德五郎東雲座に於て榊原應援の大演說會を開き聲勢大に振ひ、大勢は榊原の優利を傳ふるに至つたが兩派の運動員は五百人に達し、大口派は有權者を運動員とし罐詰政策を取るに至つた。理想選擧で二回まで立候補した國民黨院外團の三輪富十が東京より來演し同黨の大口の應援をせず政友派の榊原の應援演說を爲したことは異樣の觀を爲して居た。

第十二區寶飯南北設樂は此選擧に際し藤田壽三郎が突如として第十二區に出馬したのは平和裏の爆彈であつた。壽三郎は明治十五年二月生で此時四十三歲、青年時には豐橋船町服部彌八醬油製造の倉働きをして居た男で、寶飯郡蒲郡の人である。其奮鬪努力の結果は次第に産を爲し歐洲大戰に伴ふ黃金の洪水時代の風雲に乘じ織布業の發展好況に投じ一躍巨萬の成金と爲り大正八年九月政友會候補補として縣會議員選擧に出馬し當選し、金の有るに任かせて一躍代議士候補として打つて出たのである。

藤田に對し寶飯郡國府の怪傑武田賢治中立を標榜して出馬を宣したが、武田一流經濟的選擧運動に對して每時も郡有志の反感を買ひ落選の外は無かつたが、今次は小選擧區制なるが故に其反感も露骨となり白井九一郎、杉浦兵藏、中村又藏、加藤六藏等は淺井喜重を擁立し武田の落選を期するに至り同區の憲政派は二分して勢ひ、政友派の藤田壽三郎に幸ひするに至つたのは選擧界心理の反動的作用の微を窺ふに足るものがある。

加藤憲政會總裁は名古屋並に西三方面に於ける應援演說の爲め出張した歸途、第十二區の淺井喜重の爲めに蒲郡に於て演說

することゝなり、同派は之に依り一擧に藤田派を擊碎するの計劃であつた。開會は午後五時の豫定で廣告し準備を進め聽衆堂に滿ち立錐の餘地無き盛況であつたが、加藤總裁の着蒲は五時が變じて九時となつた。然るに總裁一人の演說として他に辯士の準備無く、九時迄聽衆を待たすことは事態不可能なり淺井派は全く立往生の際急報に依り駈付けた參陽新報の主筆近藤鹿重は五時より九時過ぎに至るまで獨り壇上の人と爲つて長廣舌を揮ひ演壇を加藤總裁に引渡すを得、四時間餘繋ぎ留めたなど選擧演說ならでは見られぬ風景であつた。

第十三區渥美、八名。從來豐橋を中心として渥美、八名の選擧區であつたのが、豐橋が獨立選擧區となり、單に渥美、八名の二郡と爲つた同區は、八名は到底渥美の敵に非らず、代議士選擧に就いては唯渥美の意の儘であり、又八名唯一の人物鈴木麟三が故人となつてからは又覇を爭ふの人物も無く此選擧に於ては渥美郡の元老吉原祐太郎政友派唯一の候補者として出馬し近藤犀市郎參謀として郡內有力者擧つて援助者となり、八名方面は中村猪三郎、戸村文三郎、奧平彌太一、小林峰松等吉原の聲援者となり、殆んど無風狀態の觀を呈した。非政友派は田原町の山內庄藏を擁立し一寸形勢を示したが庄藏の固辭に依り吉原の獨舞臺となつた。此狀態を見て憚慨したのは八名町非政友派の後藤喜作で自から名刺を散布し立候補を宣し百三十六票の票數を得たのは御愛嬌であつた。

西三選擧界

第三區岡崎市も豐橋と同じく始めて獨立選擧區となり從來の面目を一新したが、由來非政友派の根據地として牢乎として拔くべからざるものがあつた。憲政會は手島鍬司を擁立し一擧政友派を壓倒すべく策した。之に對し政友派は前代議士福岡精一を出馬せしめて堅實の陣營を張り、手島派が總裁加藤高明の應援を得寶來座に於て政見發表演說會を開催し大聲焰を揚ぐれば福岡派は文部大臣中橋德五郎が中等學校視察に繪口して出張したのを迎へて大歡迎會を開き更に內務大臣床次竹次郎の應援を得て公會堂に選擧演說會を開ひて對抗し競爭は日一日劇甚を極めた。

第十區碧海郡は從來の幡豆と別かれて一郡のみの選擧區となり、憲政會の早川龍介に對して政友會の前司法次官小山溫は好箇の取組であつた。五月二日早川派は總裁加藤高明を招き政友派の根據地刈谷町に於て演說會を開き、小山派は安城農林學校視察の中橋文相を迎へて氣勢を揚げ、明治用水の利害問題に觸れた違反事件が勃發し早川の參謀格中根倉三郎外數名は選擧運動最中に名古屋地方裁判所岡崎支部山田檢事の取調べを受け氣勢を殺いだが早川派の勢力は容易に拔き難きものがあつた。

幡豆、額田、東、西加茂の四郡を一括して定員二名の第十一區は額田郡幸田村出身辯護士齋藤喬太郎は政友派の新候補として出馬し、之に對し知多、愛知を根據として居た憲政派鈴置倉次郎輸入候補として對抗定員二名に對し此兩人の當選率は當然有利である處へ中立を標榜して九鬼五三郎といふ餘り知られない男が飛び出し、兎に角三派對立の形を爲したが選擧區民は九鬼を問題としなかつた。總裁加藤高明は愛知縣憲政派の巨頭鈴置の爲めに西尾町に於て應援演說を爲し憲政派を激勵した。

選擧の結果當選者は左の通りであつた。

愛知縣

（定員十七名）

第一區　名古屋市　三名

當　加藤重三郎（政友）（四、三二一）
當　小山松壽（憲政）（三、一四七）
當　磯貝浩（憲政）（二、八八四）
次　加藤錄五郎（政友）（一、八三五）
小　出鈔（國民）（八六四）

第二區　豐橋市　一名

當　大口喜六　（國民）（一、四五〇）

次　柳原繇吾　（政友）（八九〇）

第三區　岡崎市　一名

當　手島鍬司　（憲政）（二、一七三）

次　福岡精一　（政友）（六九〇）

第四區　愛知、西春日井　二名

當　下出民義　（政友）（四、二〇六）

當　田中善立　（憲政）（三、二七六）

次　笹原辰太郎　（政友）（三、二四一）

次　日比野寛　（憲政）（二、一五七）

第五區　東春日井郡　一名

當　波多野喜右衛門　（政友）（三、三〇〇）

次　河村富政　（　）（三、二九七）

第六區　丹羽、葉栗　一名

當　山本清三郎　（政友）（三、四六一）

次　大池鎌一　（政友）（三、一七五）

加藤鯛一　（憲政）（二、八八六）

第七區　中島郡　一名

當　瀧　正雄　（政友）（五、七六〇）

第八區　海部郡　一名

當　三輪市太郎　（政友）（四、三二八）

次　黑田惇二　（憲政）（三、三〇〇）

第九區　知多郡　一名

當　清水市太郎　（政友）（七、〇二二）

次　盛田善平　（憲政）（四、六六一）

第十區　碧海郡　一名

當　早川龍介　（憲政）（五、六八二）

次　小山溫　（政友）（五、五八五）

第十一區　幡豆、額田、東西加茂　二名

當　齋藤鷲太郎　（政友）（八、一三五）

當　鈴置倉次郎　（憲政）（五、四二〇）

第十二區　寶飯、南北設樂　一名

當　藤田壽三郎　（政友）（三、七六二）

次　武田賢治　（中立）（三、三五四）

淺井喜重　（憲政）（三、二一六）

第十三區　渥美、八名　一名

當　吉原祐太郎　（政友）（五、一六六）
次　後藤喜作　（一三六）

右選擧後第五區の波多野喜右衞門選擧違反の結果失脚し補缺選擧に於て同郡瀬戸町政友派加藤紋右衞門が當選した。

東三政友倶樂部

寶飯郡豐川町の素封家中尾十郎は同郡三谷町竹内傳八郎の二男で、幼名三次、初代十郎の養嗣子となり十郎を襲名したのであるが、同郡一非政友派の地盤として先代加藤六藏以來政友派は極めて少數であつたが、十郎は政友派に大なる好意を持ち藤當壽三郎の縣議並代議士たるを得たるは十郎の援助に依つたものである。十郎は自分は表面には立たないが同志に對し東三政友會の支部設置を慫慂した結果、近藤壽市郎等奔走し東三政友倶樂部を創設することゝなり、大正九年八月東雲座に於て發會式を擧げ東三選出縣會議員を始じめ政友會員一千餘名參集し榊原辨吾を座長に擧げ會則其他を決議し宴會に移り夜は政談演說會を同座に開き、近藤壽市郎、木下繼次郎、龍野周一郎、大岡和道等長廣舌を揮ひ氣勢を昂げたが、其翌十一年の夏東三政倶樂部の北設支部を設くることゝなり、北設樂郡本郷町山玉座に於て發會式を擧げた政友會本部から山口義一、萩亮、豐橋から近藤壽市郎、榊原辨吾、鈴木五六が列席した。愛知縣の西藏である北設樂に斯かる政談集合の催ふされたこと同地方未曾有の事で、土地會員としては振草の片桐保次郎、段嶺の加藤安太郎、田口の關谷守男、御殿の伊藤武平、倉淵勝平、金指百之、津具の村松壽之助、武節の青木有本、下津具の佐々木信等有力者を網羅したもので地方政治思想喚起に資する大なるものがあつた。

東三革新會

大正十一年十月六日内務文部兩省の主催で、全國各郡市一名を選出東京に於て全國青年代表者大會を東京で開いた時、豐橋聯合青年團副團長山本市郎豐橋青年團を代表して出席した。此時畏くも　攝政宮殿下より御令旨を賜はりたに對して奉る答文を捧呈したが山本は其奉答文起草委員長に推されたので、歸來人氣高翻青年界の寵兒と爲つたが、

一郎は犬養木堂に私淑の其人格高節を崇敬して居たので、自然國民黨に接近し、東三立憲青年黨の創設を計劃し原田仙次郎、小川鹿三、太田幸治竹下角次郎、伊藤六山藤と共に其計劃を進め大正十一年十一月三日千歳樓に於て結成式を擧げ當時の豐橋同志團體即ち大口派に屬する市會議員は全部之に參加することゝなり會する者七十餘名、立憲青年黨を改めて東三革新會とし左の決議を爲した。

綱領

一、吾人ハ既成政黨ニ超越シ暗憺ナル現代政治ノ革新ヲ期ス
一、吾人ハ地方自治ニ對スル中央政黨ノ直射的勢力ヲ拒否シ以テ自治ノ完成ヲ期ス
一、吾人ハ常ニ正義ニ與ミシ我ガ國建國ノ精神ニ惇ラザルコトヲ期ス

會則梗概は東三在住者及び東三に關係あるもので、滿二十歳以上の男子を以て組織することゝし、豐橋に本部を各地に支部を設くることゝし、役員會の決議で顧問を置くことを得とし、大口喜六、後援會の色彩濃厚で反對派の攪亂もあつたが、普選の即時斷行に共鳴し歳の暮豐橋座に於て普選斷行の演說會を開き山本一郎、小川鹿三、高澤彦七、伊藤六山、大場益次郎、小山信、大口喜六等獅子吼を爲し熱焔を揚げた。

原敬兇刃に殪る

原内閣の當時大正7年五月二十四日、尼港事件の慘劇が勃發して天下の耳目を振動せしめた。西伯利出兵の我が海軍將兵三百七十五人と、邦人三百五十人が浩海州ニコライスクに於て解氷期を待ちつゝ冬籠中バルチザンに慘殺されたのであつた。我等は六月三日尼港を占領して調査した處、慘憺は五月二十四日より二十七日に亘りて行はれたものゝ如く慘、殺された將校の手記に依りて支那の砲艦三隻が暴戾を極め我が守備兵が激戰や機關砲十二門を以て、我を亂射した事實を發見し支那に交渉して双方委員を派遣して實地調査の末其眞相を明かにしたびで、支那に向つて

一、支那中央政府は日本に對し遺憾の亡を表すること

二、關係軍艦は浦鹽に在る日本軍司令官に謝罪すること
三、該砲艦關係將兵を處分すること
四、被害者遺族に弔慰金を贈ること
等で之を實行せしめた。

此時分米國に於て日本人排斥問題が起つた。日本の勢力が東亞に於て次第に伸展すると同時に英米其他日本を蔑視し、畏怖し黄禍論を唱ふるの趨勢し漸高を見米國に於ては我が移民に對して締出しを實行した。即ち大正九年十二月三日人民投票に依り外人ひ土地所有權を禁止し、而して日本人は歸化權無きが故に自然土地所有權を有するを得ず、數十年間に亘つて加州中心に移民日本人經營慘憺米國の爲めに土地開拓農業振作に努めた勳勞に酬ゆるに此排斥法を以てし、國際情誼の上より暴戾極めた米國の非人道後正義の行動は痛たく我國上下を憤慨せしめた。

我が議會人は政友會絶對多數に乘じ擅恣横暴に流るゝに對し反對派の攻擊預る尖鋭化し、無所屬の林龜太郎、佐々木安五郎安藤正純、井上孝哉、松本君平、中野正剛、秋田清等十二名は革新倶樂部を組織し旣成政黨の打破を叫び、普選實現に精進した。

大正十年七月米國は海軍に々備縮小に關し華盛頓に軍縮會議を開催すべく招請し來り、同十一月英吉利、佛蘭西、伊太利、和蘭、白耳義、葡萄牙、日本、支那八ヶ國が加はり九箇國の海軍縮小を協定し我が全權として加藤友三郎海相、幣原喜重郎、駐米大使、貴族院議長德川家達が之に當り

九箇月條約は支那の領土保全、機會均等を主眼として協定制立し、五箇國協定に日本、英吉利、亞米利加、佛蘭西、伊太利の海軍力制限に關し、佛伊は脱退し日英米は三、五、五の比率で協定が成立した。

四箇國協は日、英、米、佛の太平洋に於ける所屬島嶼の權利を維持し協定に依つて紛議を處理することゝし、日本は小笠原

嶼の軍事施設を封せられたが米國は軍事施設の自由を確保したるなど、彼等勝手の我儘は此時國際會議上明かにされ列强に備ふるの用意は此時より充分に布陣されたのであるがやつと小帝國の域を脱した列强の仲間入をしたばかり我が國は何等爲す所を知らず被原制外交の下に雌伏したことは言語道斷の次第であつたが、國内財政上軍縮を是れ事とし尾崎行雄犬養毅始め軍縮論の潮流急なるの時原内閣は我國の制壓に聽從するを以て寧ろ國策と爲すべく、思惟かの如く見て識者を少なからず憚慨せしめた。國内に於ては大藏大臣高橋是清、商工大臣山本達雄、文部大臣中榎德五郎の私有株券を賣却處分した事件ありて議會の商題となり、滿鐵當事者が廢坑に均しき塔連炭坑を不當高價に買收、内田信也の持船不當高價買上事件、關東民政署長中野有光の阿片富賣事件等秕政連發の對する攻擊の火の手漸やく猛烈になりなる折柄總理大臣原敬が政友會近畿大會、大正十一年十一月五日京都に於て開會に際し之に臨席すべく同四日午後二時二十五分發列車に乘込まんとし東京驛内を野田邦太郎等と共に前進中前方より來れる一青年が行逆の刹那に原敬に衝突し利刄を以て衝突の勢ひを胸部を差し貫き即死せしめた椿事あり、森有禮星亭二人に對する歩行より更に慘劇を極めたのは刺客の腕の利きたるに非らずして衝突の勢ひを自然に利用し得た偶然の結果と見られて居た。刺客名は中岡良一、大塚驛の轉轍手であつた。

當時驛内は私服刑事を以て滿たされて居たが鳥内帽を疲りし一青年の姿を認めた原敬はあの青年はと警護の私警服官に注意した處其男はあれも同僚ですと何の事も無く言ひ切つたのであゝそうかと安心して勢ひよく前進した出合頭を利用されたことは何とも不覺の至りと言ふよりは其護衛警官の爲めにまんまと術中に陷つた如き結果となつたことは言語の災厄であた。

豐橋の新聞界

豐橋は土地柄とて新聞は發達しない。明治二十三年頃西川由次郎加藤平吉等が「民の心」といふを發刊した。之は日刊紙では無く月刊物であつた。其後明治三十二年二月十一日を以て參陽新報が創刊された。小型の日刊紙で題字は

詩人小野湖山晩年の筆であつた。週間廣告新聞から變形の發達したもので、廣告新聞は春風舍新聞販賣店の平松市藏が明治二十八年に始めたもので之が豐橋に於ける新聞の濫觴である。

參陽新報は遊佐發、平松市藏、豐川堂主人高須廣治等の發起したもので辯護士藤波泰吉筆名一哉が辯護士の資格を喪失して浪人して居たので主筆となつた。藤波は伊良湖岬堀切の出身で文筆の才もあり、俳句は相當のもので俳號は流蛙土地の新聞と言ふので歡迎されて居た。最初は高須が經營の衝に當つて居たが其後關係を斷ち、印刷を引受けて居た久野惟吉が經營を引受け社長と爲つた。

藤波は早稻田普通科を出た者であり大口喜六も亦寄稿したので、それに久野が三浦碧水であり旁々改進系の色彩が濃厚と爲つたので自由派の遊作は自然に關係を斷つ樣になつた。

打漁網兇徒襲事件で入獄して居た、渥美郡高豐村小澤の朝倉成太郎出獄放浪生活をして居る內に明治三十四年獨力で『めざまし新聞』を發刊した。其後『社交新　』と改題した。豐橋三等郵便局長から實業界の巨頭と爲聞つた遠藤安太郎の義弟長三郎が朝倉と共同經營で社交新聞を『新朝報』と改題し伊良湖岬村和地の河合弘毅が主筆となり、參陽に對し政友派の機關紙の如く見られて居た。

長三郎は恐喝事件弘毅は華禍事件で入檻中近藤壽市郎が經營に當つて居た、これは日露戰爭中であつた。近藤は黑須助三郎と『旭光』といふ雜誌を出したが三號雜誌として終りを告げた。

明治三十二年に加藤平吉、深井正雲、遊佐發、池谷八百作、近藤壽市郎等は自由黨機關紙『東海日報』を出したが長くは續かなかつた。

新聞販賣店の平松市藏は新愛知の販賣政策から『三河雜報』といふ新愛知附錄を刊行し渥美郡泉村の花井晴助を編輯主任とし相當の成果を得たが其後は『三遠日報』と改題し河合弘毅が報筆して居たが、之が對抗策とし明治四十二年八月名古屋新聞社は參陽新報の藤波を引拔き同派豐橋支局長とし『二遠日報名古屋新聞附錄』を刊行せしめた。

市藏と長三郎は社業改革の上から參陽新報は山本新太郎、新朝報は井上欣二郎を退社せしめた處、友人は憤激して友人共同經營で豐橋新聞を發行し野芳水を主筆としたが一年小後に廢刊した。

藤波の退社後參陽新報は八名郡富岡の近藤鹿堂が主筆と爲つたが社長久野惟吉と意見合はず明治や十二年退社し、有松曉、小田冷劍、池田清雄、等が主筆と爲つたが大正三年の春經營難に陷いり南設樂郡東鄕村の中島猿之助が讓受けたので鹿堂は再び入つて主筆となり、參陽合資會社を解散して中島の簡人經營と爲し、三年後に高橋小十郎に讓渡した。

河合弘毅の退社後朝報は葛城亦夢が主筆と爲つたが筆禍事件で退社し、寶飯郡大塚の山口光圓が主筆となつた。大正二年に上傳馬豐新舍讀賣新聞販賣店三賀洋は『豐橋新聞』を發刊したが二年で廢刊し、新朝報の靑年記者等にて吉田村の中村風聲は大正六年二月十一日『豐橋日々新聞』を創刊し社長より記者小使配達に至るまで單獨で兼ねて居たが過の爲め倒れ、倉光天庫が主筆となり豐川町の山本殘雪も亦入社して論壇を賑はした。

藤波一哉が名古屋新聞本社に轉じた後の三遠日報名古屋附錄は中川昏、鷹野白鷹を經て丸地古城となり、新愛知三遠日報は其後稻澤南海、西岡廣が局に當り廣が豐橋市土木課長となるや吉田江村、武田豐太郎、加藤憲夫となつたが其後新愛知は三河版を作り三遠日報を廢刊した。

高橋內閣の起仆

總理大臣原敬橫死の結果大正十一年十一月五日內閣組織の大命は大藏大臣であつた高橋是清に下り、高橋內閣は成立し其儘前內閣通りで高橋は意外の拾ひ者をした。普選問題に依る信を國民に問ふべく閣散から總選擧の結果は豫定通り政友會大多數で有つたが、之は舊選擧法に依る選擧なので事實上非普選派が多數になるのは當然のことであるが、一般國民の普選熱は愈々高潮し、大正十年十二月二十六日開かれた第四十五議會に對する國民の要望は非常の勢を以て殺到することゝなつた。此大勢は獨立の生計を固守して居た憲政會總裁加藤高明をして其固執を撤して普選實現の貫徹を期するに至らしめ、憲政會、國民黨無所屬倶樂部の三派聯合懇和會は議會開會の廿六日夜築地の精養軒に開かれ、翌十一年一月二十六日には赤坂の山王臺に國民大會を開き、東京、大阪普選新聞記者聯盟も結成し、更に二月五日十一日の二回示威運動を行ひ、休會明けの二月二十二日には憲政會の安達謙藏、小泉又次郎、成田恒之、小山松壽、森田茂、國民黨の西村丹治郎、高橋覺太郎、無所屬倶の松本君平、

庚申倶の山口巴太三郎の九名の署名を以て提案し、提案理由説明は河野廣中、贊成演説は尾崎、島田、永井、濱田、清瀬等五十餘名といふ大掛りの段取りで河野廣中の提案理由説明に次で討論に入り、政友會の河原茂輔の反對演説に對し國民黨の清瀬一郎の贊成演説あり、原政友會の中西六三郎が反對演説を爲すべく壇上に進んだ刹那、西側傍聽席から青大將を議場内へ投下したものがあつたので、議場はわつと騒沸した機に乘じ佐々木蒙古吐嗟演壇を占領して動かず大混亂の場面を呈したが、普選案は百四十七に對する二百四十三の大多數を以て否決し去つた。

一方院方に於ける普選斷行請願三萬の群衆は衆議員を包圍し、如何なる棒事を演ずべきか測り知るべからざる光景を呈するに至つた。

此形勢を見た憲政會の大竹貫一、齋藤今一郎、高木正年等は在野黨大合同論を唱へ建言したが、加藤總裁が容れなかつたので脱黨した。

此議會の末期に於て文部大臣中橋德五郎が專門學校を大學に昇格すべく聲明したに對し、貴族院に於て文部行政と矛のするではないかとの質問あり責任問題を惹起し、中橋は内閣の聯帶責任であると主張し、高橋首相は聯帶責任に非らずと斷定した中橋は又委員會と本會議に於て相違せる爲辨ありたりとて文相に二枚舌問題が起り、内閣の威信を損するに至り之を保持する爲め中橋文相と元田鐵道を引退せしめ、代ゆるに山本悌二郎と小川平吉を以てせんとしたが中橋と元田は聯帶責任説を固執して應ぜず、西園寺元總裁の取做しにより一時を糊塗したが六月に至り高橋首相は又々改造を企てたが成らず、高橋首相は内閣不統一の責任を負ふて骸骨を乞ひ他の閣僚も總辭職を爲し絶對多數黨の政友會に分裂の兆惡然たるものがあるに至つた。

加藤内閣から山本内閣

高橋内閣瓦解の結果は大命は海軍大將加藤友三郎に降り、加藤内閣が出來た。

加藤大將は極めて冷靜明識の人で、桂の如き慊味も無く政治的野心など持つて居ず、澹如として軍事にも政治にも明識卓腕を揮つた處、珍らしき一偉物であつたが、不幸病の爲め殪れて十分に材能を發揮するに至らなかつた。而し四十六議會は大正十一年十一月二十七日加藤内閣の下に開會十二年三月二十六日無事閉會したが、此議會にも普選案は提案されよゞ政友會は多數を以て否決した。

此時國民黨は解黨し無所屬と合して革新倶樂部を組織し、犬養毅と尾崎行雄とは久しぶりで一所に爲つた。

總理大臣加藤友三郎の逝去に依り大正十二年八月三十一日大命は陸軍大將山本權兵衛に降下した。曩きにシーメンス主任の餘決を喰つて到れて以來雌伏十年にして再び此機會を廻り合せ、今度こそはと組閣協議中ガラ〳〵と來たのは例の大震火災で人呼んで、地震内閣と稱した閣員中に内務大臣後藤新平、遞信大臣兼文部大臣に犬養毅を見たのは一寸異彩を放ち、豪壯富んだ權兵衛の威容は議會を壓倒するに足るものがあつたが、震災に關する復興事業は後藤の多才を以てするも其規模放慢過大に過ぎ一般の不評と議會の反對を買ひ縮少するの外は無かつたが、大正十二年十二月二十七日第四十八議會開院式當日虎の門大不詳事件の突發は全く意外と恐懼の次第で山本内閣は其責任に依り即日總辭職を爲した山本權兵衛といふ男は全く廻はり合せの惡い氣の毒の人であつた。

第三區の補缺選擧

第三區岡崎市選出憲政會代議士手峰鍬司は病氣の爲め大正十二年九月二十三日死去したので、同年十一月十日補缺選擧を執行したが殘任期間は僅がに一年に過ぎないので、競爭者も無からうと同地の財閥千賀千太郎が中立を標榜して名乘りを揚げると、憲政會は同じ財閥の近藤重三郎を出馬せしめた。斯くと見た政友會の福岡精一は雪辱戰として出馬する同派の後藤文一郎

も乘り出したので無風地一變して大修羅場と化し、日の出る樣な激戰となつたが此亂戰は千賀の立場を有利にしる人の當選を見たが同人は當選後憲政會に入黨した。千賀は明治十五年十一月生當時四十二歳であつた。

清浦内閣

大正十三年一月七日樞密院議長清浦圭吾に内閣組織の大命は下つた。曩に清浦は鰻香内閣の稱號を受けて流産に終つた歴史があるので、今次は滿全を期し貴族院の研究會を中心とした内閣を組織した。政友會と研究會と提携し、議會縱斷の例を原敬が作つて以來、研究會は漸やく政局に實權を有するに至り、之を除外しては内閣の維持出來難き情勢を馴致するに至つた。清浦内閣の内務大臣は水野練太郎で、水野と床次竹次郎とは聲息相通ずるものがあり、政友會は清浦内閣を支持すべく見てたが政黨を基礎とせざる内閣には斷然反對すべしと主張せるは高橋是清と横田千之助であつた。横田は床次の温順に乘じ之を操縱して豫期の的を滿進したが、問屋はしかく簡單に卸さず、床次は最後の決心をするに至つた。議會に絶對多數を有しながら政權は屢々其門前を素通りするは政友總裁高橋に統率力無きが爲めなりとは政友會多數の痛感する處であり、事實又それに相違無かつたので、高橋是清邸の會合に於て高橋が非常の決心を以て爵位を辭し、貴族院を去り一平民として獲憲に邁進すべしと宣明した其位山本達雄、床次竹次郎、中橋德五郎、元田肇等は分離を聲明して政友本黨を組織し、全國に飛電して同意を求めた實に大正十三年一月二十日であつた。

政友會代議士は全く二分し政友本黨百四十九名、政友會百二十九名、全國の支部は之に比例して兩派に別れながら愛知縣の政友會は代議士、縣會議員等全部本黨に去り跡に殘つたのは縣會議員瀨川嘉助と村山爲章の二人のみとなつた。

之は分裂決行前山本達雄、床次竹次郎の名で新愛知社長大島宇吉、下出民義始めそれ〴〵電報や書面で贊同を求めたので、翕然として本黨に奔倒した譯である。床次の秘書官として柾棧に參して居た瀧正雄の注意が愛知縣に對しては徹底して居たことも想はれる。

當時新愛知の記者として東京に居た筆者が二十日の午前床次邸を訪問した時、偶ま誰も居なかつた好機會であつた關係もあるが、床次は其立場と經過とを語つて分裂の已むを得ない事情を話した事はまだ全く機密に屬して居るにも拘はらず、打明話をされて見ると無條件で好感を持つことになる。何年か後に大島社長が筆者に語つたことがある「あの時ばかりは君と桐生悠々主筆と私と三人の意見が全く一致して居たよ」と。

二十日の夕方薄暗がりの政友會本部の一室に居殘つて居た五六名が圓卓を圍んで話をした分裂發表の直前なので、しんみりした眞劍味の會話であつた。其人達は山本條太郎、秦豐助、其他いづれも代議士で代議士以外は筆者だけであつた。噂のある分離問題が話題であつた。秦と筆者の外は皆分離否認說で床次總務が分離派の一人であるなど夢にも思つて居なかつた。筆者がいや床次總務も分離派の一人だと言ふと山本が言つた。此君の見方は皆と變つて居ると熱心に耳を傾け深い注意を拂つた。すると秦が僕も今朝床次總務と面會したが矢張そう思うと言つて筆者の言に裏書した。床次派で無い人は代議士でも此程度に何も知らないで居たのだが、二十一日の朝刊には各紙いづれも政友會の分裂、政友本黨の成立を仰々しく揭載したのであつた

政友會愛知支部は瀨川嘉助と村山爲章が孤壘を守り、三河部では後藤文一郎と河合弘毅が頑張つて居たが、後に瀨川と村山とは代議士候補に就いて衝突し村山は脫會して憲政會に入り、瀨川一人で支部の看板を支持して居た。分裂の直後に岡崎邦輔望月圭介、武藤金吉等が出張して政友會愛知支部の取纏めに掛つたが、如何とも施すべき術が無く金吉は瀨川の手を取つて男泣きに泣いたと言ふことであつた。といふは武藤が政友會から特派されて支部總會三百餘名に對して長廣舌を揮つたのはつい半年前の事であつたからである。

政友本黨東海十一州大會

政友會本黨東海十一州大會は大正十三年三月二十五日名古屋國技館に於て開會し、本部より床次竹次郎、元田肇、中西六三郎、牧野良三、吉植庄郎等出張臨席し、元春文衛座長席に就き宣言決議を爲し、續いて政友本黨愛知支部の發會式に移り、鈴木五六開會を宣し、三輪市太郎座長として左の宣言決議を爲して會を閉ぢ、床次始め本部特派員の演說に移り全國に先んじ大聲焔を揚げた。

宣　言

政友本黨愛知支部ハ政友本黨ノ天下ニ聲明シタル創立ノ趣旨ヲ體シ、着實穩健ヲ旨トシ、傳統ノ精神ヲ尊重シ、時代ノ趨勢ニ順應シテ內外ノ局面ニ善處センコトヲ期シ、曩キニ縣下ノ立憲政友會々員ハ小部分ヲ除キ擧テ政友本黨ニ加盟スルト共ニ新ニ本黨愛知支部ヲ設立シテ國家憲政ノ爲ニ黨ノ方針ニ從ヒ、協力一致直往邁進センコトヲ期セリ。彼ノ俗論ニ迎合シテ公黨ノ本領ヲ忘レ、過激破壞ノ言動ヲ敢テシテ黨利黨略ニ熱狂シ、國家ノ秩序ヲ紊シ憲政擁護ノ美名ニ隱レ、政權爭奪ニ沒頭シテ却ツテ事端ヲ滋クシ、或ハ階級鬪爭ノ禍根ヲ助長シテ階級相互ノ反感ヲ排擊シ、濫リニ煽動的狂態ヲ演スルガ如キ斷々乎トシテ排斥セザルベカラズ。

若シ夫レ中央集權ノ弊ラ矯メテ各地ヲシテ之ニ均霑セシムルガ如キハ、緩急輕重ヲ圖リテ愼重ニ考察シ以テ縣ノ公利公益ノ增進ニ貢獻センコトヲ期ス。以テ宣ス

決　議

一、農村救濟ノ施設ヲ爲スコト

一、商工業ノ隆盛ヲ圖ルベキ施設ヲ爲スコト

一、交通機關並ニ治水計劃ノ完備ヲ期ス

一、都市計劃並ニ港灣ノ完備ヲ期ス

大正十三年三月二十五日

第二次獲憲運動

政友本黨愛知支部

清浦內閣の出現を以て特權內閣なく超然內閣なり憲政の逆轉なりとし、各黨各派は本黨を除くの外獲憲運動勃發し尾崎行雄を誘導した。尾崎は此革新倶樂部に犬養と室を同うして居だが、倶樂部は政黨に非らず且つ政權を目的とする獲憲運動は御免蒙るとて容易に應じなかつたが、憲政革新の知人は再三再四熱求し終に條件附にて尾崎も參加することゝ爲つた。憲政會主催の同志代議士招待會は大正十三年一月清浦內閣成立間も無き一月二十二日上野精養軒に開催した。憲政會總裁加藤高明、政友會總裁高橋是清、革新倶樂部領袖犬養毅、尾崎行雄の四頭目を始じめ、政友會の岡部邦輔、小川平吉、橫田千之助、三土忠藏、望月圭介、島田俊雄、山本悌次郎、鵜澤聰明、東武、憲政會の若槻禮次郎、安達謙藏、下岡忠治、江木翼、濱口雄幸、小泉又次郎、片岡直溫、革新倶樂部の古島一雄等其他各派代議士院外團、地方代表有志一千餘名の多數に達し、加藤平四郎の開會の辭に次て加藤高明、高橋是清、犬養毅を始じめ永井柳太郎、鈴木錠太郎、佐々木安五郎、南　三等の演說あり滿場を熱狂せしめた。

一月二十二日議會は再會したが、東宮殿下御成婚に關する豫算を議決し三十一日まで休會した、此機會を利用し加藤高明、高橋是清、犬養毅、尾崎行雄の四巨頭は大阪に於ける憲政擁護大會に臨み長廣舌を揮つたが、其途中列車が一宮驛を通過する際其轉覆を企てた者があつたが、列車は無事に通過することを得た。在野黨は此事件を重大問題とし、休會明け三十一日の議會に於て濱田國松之を報告し、鐵道大臣小松謙次郎之を說明せんとするや議場は清浦首相の說明を要求して已まないので、清浦首相登壇せる刹那、議場に潛入し居たる一壯漢壇上に飛び上りて萬歲々々と連呼したので、議場は呆氣に取られて居る際、代議士春日俊文壇上に進んで清浦首相を擁護せるが如く追拂ふが如くぐん〳〵進んで首相を大臣席に復せしめたが、議場騷然

護憲三派の結束成り絶對多數を占めたので爲す所を知らなかつた。清浦首相は此突發事件を機とし解散を奏請し即日解散の詔敕は下つた。

第十五回總選擧

東三河の光景

第二區豐橋市に於ては大口前代議士逸早く立候補を爲し、黑柳清次參謀として中八町の同志團體事務所に選擧事務所を設け小山信、安藤角次郎、伊藤治郎、神戸小三郎、藤田保吉等幹部となり、市内各寺院に於て言論戰を開始し、言論部は小山信、山本一郎、高澤彦七、近藤鹿堂、丸地泰次郎、宮本佐重、太田幸治、加藤勘吉、住野樂三郎、山本庫次等壇上の闘士として善戰健闘を續け、運動部は各戸虱潰し主義を取つて散兵陣を布いた。之に對し政友本黨は榊原辨吾の雪辱戰として巨頭大口を倒すべく辯護士縣會議長の鈴木五六を擁立し、榊原辨吾參謀長として吳服町白濟館に選擧事務所を設け、野澤藤五郎、三浦源六榊原瀨一、本多卯三郎、藤田力作、河合孜郎等幹部として活躍し、本部より山本達雄激勵の爲め愛知縣方面へ出張し、先づ豐橋に下車して陣中見舞を爲し一段の活氣を添へたのであつた。同派の清水熊太郎は製絲組の別働隊を組織して、三ノ輪から飯村一帶の夜襲戰を敢行したので大口派は柔道組といふ一隊を飯村方面へ繰出し、双方入亂れて衝突を見た。しかし本黨派は政府黨といふ利器を利用し例の警察恥みの遺ひ分けは苦樂の分水嶺として利便の相違は頗る大なるものがあるが、其處に虚々實々の闇暗戰術があつて選擧なるものゝ馬鹿らしさを物語つて居る。愈々投票間際となると大口派は例の慣用手段の自動車運搬事務所罐詰策を用ひ、夜を明かして選擧場に臨んだものであるが、之が皆運動員の眉印を着けて居るので警察も手の下し様がない。

鈴木五六派は警察採點の點數を信頼して勝利を確信し大口打倒の歡聲を揚げたが、大口派に裏をかゝれて失敗し大口をして「順逆分明政戰中、一片冊心懐奉公」などゝ口占せしむるに至つた。

第十二區寶飯、南、北設樂では六代議士故加藤六藏の嗣子正雄が襲名して矢張六藏となり、少年期より父の政戰の感化を受けて政界に興味を持ち、縣會議員として政黨界に沒頭して居たが、此選擧に際し始めて出馬した。明治二十四年十二月十日生れで此時三十三歳であつた。北川丈吉參謀として西部は杉浦兵吉、中部は白井九一郎、山口祐造、東部は中村又藏等中心指揮者として寶飯一流の戰線を張り、豐橋から大場恒次郎、丸地古城林邑二等の辯士言論戰に聲援を與へた。

鈴木正吾

寶飯郡御津村出身の鈴木正吾は杉浦武雄、市部縣會議員野口令吉と豐橋中學同窓の三あばれ者として知られて居たが、三人いづれも政界人となつて、それ〴〵獨壇場を開拓した。正吾は青年時より尾崎學堂に知られ、其門下生として學堂洋行にも同伴した程の秀才にして齒切のよい達辯家として知られ、鄕土青年崇敬の中心人物となり青年の糾合指導にも多年努力して築き上げた地盤を根據として始めて代議士選擧に名乘りを揚げ、兄の縣會議員鈴木龜造を總參謀として恩師學堂の聲援を得て言論戰一天張りの新戰術を以て舊體依然たる六藏派の舊戰術に肉薄し、黃口の青年候補として地方人士を驚嘆せしむるものがあつた。

第十三區渥美八名は前代議士吉原祐太郎を推さんとする者多く、吉原亦出馬の意勃々として期待する所が多かつた。然るに渥美郡有志詮衡委員會を田原町に開催した所、縣會議員廣中素介は極力近藤壽市郎を推薦した、素介は同地の素封家廣中鹿次郎の息で鹿次郎は第一回總選擧に非自由派から推されて立候補し、自由黨の美濃部と戰つて破れた歷史がある。鹿次郎の妻女は先代加藤六藏代議士の妹で、素介は其長子であるのだ。素介の强硬なる主張は終に近藤推薦の決定を見るに至り、同時に廣

中自から參謀となり運動も相當に負擔し渥美、八名兩郡に亘つて戰線を張つた。

近藤壽市郎

近藤壽市郎は渥美郡赤間根村高松の人、明治三年四月十五日生れで此時五十五歳である。明治二十二年の十二月後藤象二郎が大石綾井國友等を率て大同團結の獅子吼を田原龍門寺に試みた時、土地の青年達と三里半の遠方から傍聽に出掛けて、所謂政談演說なるものを聽き前參議後藤の風手に接してから政治思想にかぶれた一人である。それから四方に放浪し殊に高松に開業して居た醫師鈴木滋が熱田に移り、飯田事件に連坐し一年間の未決後無罪となつたが熱心なる自由主義の一人として村松愛藏の傘下であつた。其鈴木醫師の許に寄寓して居た關係上少なからぬ感化を受けて村松崇拜家となり、明治二十八年以來は豐橋に居住して自由黨東三支部に參加し、當時渥美郡會が自由黨絶對多數を占めて、多年逆境に在つた同派が一躍郡の大勢を制するに至つた。潮流に乘じ黨勢擴張に努力する所少なからず始めて近藤の存在を認めらるゝに至つたが、此高松と言ひ杉浦武雄の生れた細谷と言ひ浩蕩萬里水天一如の大平洋沿岸なので此海洋の感化が政黨的鬪爭心に及ぼして居たことは想像に難くない。其後代議士に當選、現に勳四等豐橋市長である。

近藤は美濃部貞亮の第一回總選擧以來村松愛藏並に吉原祐太郎の選擧運動、縣會議員選擧運動等選擧毎に關係せざるは無く運動慣れた奮鬪家として運動は御手の物であるが、不充分なのは戰費で苦戰を免がれ難いのは言ふ迄も無い。折柄愈々間際に爲つて視察に來た前代議士三輪市太郎が、陣中見舞として金五千圓を贈つたので棹尾の活氣を添へ、火の出る樣な健鬪熱戰を試みた。

所が近藤の對敵として意想外の男が突如として現はれた。それは辯護士杉浦武雄で選擧區では誰れも知らない人物であつた

杉浦武雄

杉浦武雄は近藤と同じ太平洋沿岸東へ二里ばかり隔つた二川町細谷の出身、父は杉浦六右衞門熱心なる自由黨員であつたが武雄は反對黨の憲政會に入つた。杉浦は帝大法科を卒業し司法官となり、內地を歷任し朝鮮の裁判官から辯護士となり、名古屋市大津町に事務所を持つて居た。當時流行の社會主義の色調を帶び中學時代に理科を擔當して居た講師に大口喜六と言ふがあつた。之が代議士大口である。大口と杉浦とは師弟の關係である。此關係を辿つて杉浦は大口と關係を有し、此出馬に當つては渥美郡に於ける改進黨以來の大口の地盤を讓り受け運動方針に就いても其指導を受くる所多大なものがあり、前田桂次郎參謀として又製絲王の前田健次は大島久滿次の選擧運動に關し、尾崎司法大臣庇護の下に檢擧を免がれた恩義もあり、且は同鄉の先輩として後進の爲めに多大の援助を爲し、八名郡は大岩勇夫の門下生から辯護士に爲り縣會議員に爲つた憲政會加藤正衞の鄉里なので、八名は加藤が擔當し二郡に於ける杉浦派の布陣は學識經驗ある新人雄辯家としての魅力と共に人心を引付けるに足るものがあつた。

由來渥美郡は自由黨の獨占地として郡內に反對黨として立つ者は無かつたが、福江町中山の鈴木重次郎が縣議戰に當り民政系として反旗を揚げて以來福江中心に非政友の一團を生じて居たが、此一團は杉浦の出馬を見ると履を逆さまにして之を迎へ東西呼應して勢焰を揚げ終に百練の鬪士近藤も此無名の新人の爲めに一敗地に塗みれたのであつた。此選擧で第一區名古屋市は小山松壽、田中善立と新代議士として加藤鏐五郎が政友會として始めて當選し、同派の加藤重三郎が落選した。新愛知の十數年間の主筆として筆名の高かつた悠々桐生政治が實業同志會から出馬し落選した

加藤鏐五郎

加藤鎌五郎は愛知醫專出の開業醫で醫師としては名を知られて居ないが、名古屋市政界のピカ一で政友派の闘士として健闘したもので、名古屋市政界政友派には獨り鎌五郎在りの觀が在つたが、獨り鎌五郎在るが故に多くの同志を失つて政友派の凋落を見た事實は否定が出來ない。鎌五郎は大將で無く闘士である。闘士が自己本位で全局を支配し其上に總大將が居なければ小黨孤立に陥いるは自然の成行で、名古屋政友派の凋落した原因はそれである。

加藤重三郎

加藤重三郎は明治十九年の明治法律學校出身で、前身は巡査であつたが裁判官となり臺灣の裁判官問題高野猛炬の憲法に關する司法官の特權に關する七判事の一人が此重三郎であつた。名古屋で辯護士を開業し市政界に入り、市會議長から市長となり、當時は愛知縣知事深野一三、商工會議所會頭奥田正香と三角同盟など言はれた時代もあつたが、所謂稲永事件なる疑獄を惹起し共同盟に向つて一網打盡を試みた。係り檢事は小幡豐次郎、第一審で有罪、第二審で無罪となつたが、其後小幡は言つた親分を持つなら重三郎の樣な人物をと思つたと、檢事が被告に惚れ込んだ譯であるが、其後小幡は愛知縣知事となり、深野は政友會支部長となり、加藤は政友派の代議士となり、小幡は政友派の知事としてバス濫許事件の如き露骨にして極めて愚なる惡政を臆面も無く行つた。加藤に憤慨する位の小幡だから先は此程度の二千石で有らうが、政黨、政黨的知事、そして選擧を思ふ時蓋し悚然たるものがあらう。

此選擧は政府黨たる政友本黨に人氣が無く最も人氣の有つたのは憲政派であつた。逆境十年、剛堂加藤高明の辛抱强きを以てしても殆んど閉口した處に同情が有り、國民に基礎を置かない特權内閣、所謂官僚の遺蘖内閣に對する國民の意識の反映と見るべきであつた。憲政會百五十四名、政友會百一名、政友本黨百十四名、實業同志會八名、無所屬十六名であつた。

愛知縣　定員十七名

第一區　名古屋市　三名

當　小山松壽（憲政）七、五五二
當　田中善立（憲政）七、三八一
當　加藤鎌五郎（政友）四、三九二
次　桐生政次（實同）八四八

第二區　豐橋市　一名

當　大口喜六（革新）一、四六五
次　鈴木五六（政友）一、二四二

第三區　岡崎市　一名

當　近藤重三郎（憲政）八四七
次　福岡精一（政友）五二〇
　　池田寵　二七〇
　　原眞一郎　二四六
　　齋藤鷲太郎　一七一

第四區　愛知西春日井　二名

當　松山兼三郎（政友）三、七〇五

當　鈴置倉次郎（憲政）二、七七八
次　奥村三樹之助（政友）一、二三〇
第五區　東春日井　一名
當　丹下茂十郎（政友）三、八五七
次　西脇　晋（憲政）二、三三〇
第六區　丹羽葉栗　一名
當　加藤　鯛一（憲政）七、三一八
次　中村豐次郎（政本）二、一七一
第七區　中島　一名
當　服部英明（憲政）五、一一七
次　瀧　正雄（政本）四、五一六
第八區　海部　一名
當　三輪市太郎（政本）四、三二二
次　黒田淳二（憲政）三、三六九
第九區　知多郡　一名
當　清水市太郎（政本）六、二七七
次　高井種次郎（革新）五、一一七
第十區　碧海　一名

當　武富　濟（憲政）六、三〇六
次　岡田菊次郎（政本）五、五五八
第十一區　額田、東西加茂、幡豆　二名
當　岡本實太郎（憲政）六、八七一
當　浦野謙朗（政本）六、三九六
次　鈴木均平（憲政）六、〇四二
第十二區　南、北設樂、寶飯　一名
當　加藤六藏（憲政）七、一五〇
次　藤田譯三郎（政本）三、六八二
第十三區　渥美、八名　一名
當　杉浦武雄（憲政）五、九八〇
次　近藤壽市郎（政本）三、七六九

護憲內閣

清浦內閣の下に執行した總選擧は護憲派が勝を制した。憲政か政友の與黨內閣なれば與黨派が勝を制するは數次の選擧が之を示して居たが、護憲三派を敵に廻はした政友會の二分の一である。政友本黨の與黨では絶對多數を制するは數學的に見ても不可能である。清浦內閣は元々政黨を基礎としない　內閣だとは言ふものゝ、貴族院の研究會を土臺として之と望息相通じて居た床次一派といふものは、初めから計算に入れて居た與黨で、此點床次と横田と全然方針を異にして居たのが、政友

分裂の主張原因で素因は高橋内閣の兩派反目揆離に在つたのこと言ふまでも無い。即ち高橋を偶像として居た舊自由黨側と新參の床次中將等一派との不一致に基因したものである。選擧の結果内閣維持の見込の無くなつた清浦首相は東宮裕仁親王殿下御成婚の御儀も目出度運ばせられたので、大正十三年五月二十九日京都清風莊に元老西園寺を訪ふて辭意を告げ、六月七日に總辭職を決行した。西園寺は護憲三派中の第一黨總裁加藤高明を奏薦し、大命は加藤に降下した。六月九日赤坂離宮に召されて大命を拜受した加藤は歸途赤坂表町の高橋是清、四谷簞笥町の犬養毅を訪問して奉命の次第を告げて協贊を求め、十一日三派聯合の護憲内閣を組織した。

首相加藤、内務若槻、大藏濱口、外務幣原、文部岡田、鐵道仙石、農商務高橋、司法横田、遞信犬養、陸軍宇垣、海軍財部の顔觸れで要するに高橋、犬養は伴食に過ぎなかつた。

此内閣の第一の使命は普選の實行に在るので大正十三年十二月二十六日開會の第五十議會に於て、三派協調の下に普選案可決、貴族院も亦時潮の大勢己むを得ずとして可決確定、大正十五年法律第四十七號を以て公布を見たのであるが、山本内閣にも加藤内閣にも普選實行を條件として入閣した犬養毅の努力多きに居つたことは言ふまでも無い。

かねて政界引退を期して居た高橋是清は大正十四年四月三日首相官邸に加藤首相を訪問して政友會總裁を辭し、農林兼商工大臣辭任の旨を告げ、其結果、農林には岡崎邦輔、商工には野田邦太郎の就任を見た。

田中義一の出現

伊藤が政友會を總織し、桂で同志會を組織したとは行方を異にして居るが、田中義一が政友會に飛込んだ。三人とも長州人である處に木戸以來憲政思想を持つて居た長州にはかうした傳統の在る處が武辯一天張りの薩州と全然型を異にして居る。田中が政友會飛び込みに就いては同じ長州人の久原房之助といふ例の藤田組の傳三郎の甥が帷幄の謀士であつた。久原が田中の爲めに投じた資本に六百萬圓と傳へて居るが、之は政黨總裁として支度金や政黨の合同に關する費用等にも撒布されたものである。久原は此六百萬圓で遠外使臣や遞信大臣を買ひ得て、後に政友會久原派の總裁とまで爲つた。

大正十四年四月十三日田中義一は政友會總裁と爲つた。公平で恪淡な好人物高橋是清は總裁としての黨費負擔にはほと〳〵閑口して居たので、田中擁立の計劃の成ると同時に總裁を辭して田中が政友會總裁となつたのである。田中は軍務局長時代から異色の軍人と見られて居たが、長州人としてははき〳〵した山縣や桂の樣な慊味の無い單一磊落の一傑物であつた。此時は軍事參議官であつたが、參議官を辭して總裁になると同時に革新會の犬養一派、舊國民黨等は擧げて政友會に投じ尾崎行雄一派は去つて新學倶樂部を組織した。

多年孤軍奮闘を重ねて來た犬養も其黨與は梅干の樣に縮少するばかりで、獨力政權を把握するの見込も無く其忠實なる同志黨員の身の上を思ふと實に慘憺たるものがあるので、鋭脫健闘一歩も讓らず押通して來た犬養も年々共に涙もろくなり、言はゞ乾兒の爲めに其始末をつける爲めに節を屈して政友會に合同、即ち身賣りを爲したもので功利主義者の秋田清、濱田國松などは政友入りをした爲めにいづれも議長の榮職に就くことも出來たし、財政通の大口喜六は政務次官まで爲つたのであつた。

田中義一が政友總裁となると加藤首相は直ちに之を訪問して高橋に代り、入閣を求めたが應ぜず、岡崎、野田兩人が入閣し横田の死後小川平吉が司法大臣となり、犬養の辭任は安達謙藏が遞信大臣となつたが、財政問題につき政友憲政意見を異にし政友の地租委讓に對し濱口首相斷乎として之を拒絶し、獨自の財政整理案を以て進むや兩派は分裂し、加藤内閣は十四年七月三十一日を以て總辭職を爲し、八月一日加藤高明に對し内閣再總織の大命降下、憲政會單獨の内閣と爲り前派閣員再任の外内閣書記官長泣木羽黒司法大臣に、大藏政務次官の早速整藏が農林大臣に、内務政務官の片岡直溫が商工大臣となつた。

豐橋市選出の大口喜六は秋田清、濱田國松、古島一雄、松本實等二十餘名と共に犬養に從つて政友會に入り多年犬猿以上の反目、嫉視、暗戰激闘を續けて來た同派も、政友會に融々するの奇現象を呈するに至り、大口は豐橋上傳馬河原座に於て鄕黨

に政友入りの顚末を報告して承認を求め大口の率ひて居た豐橋同志會員も擧げて政友會に入會することになつた。

大口は最初は村松一派の自由黨に入黨すべき考を持つて居たが、豐橋自由派中には隨分放縱不羈の人物があり、氣分の合はない處に改進黨の誘導を受け之に投ずるに至り、自由派の後藤文一郎とは自改合同以來格別の間柄でもあつたが、政友系の豐橋實業談話會とは永炭相容れざるに至つた。談話會は遠藤安太郎の組織した一團で實業界に於ける實勢力を握るといふが目的であつた。大口と遠藤とは小學時代同級生で格別仲よしであつたが、遠藤は先代からの三等郵便局長であつたのが、二等郵便局が出來た爲めやめることゝなり、實業界に乘り出し實業談話會を組織し勢力を張り會議所會頭にもなつた、大口は又町會議員、町長、郡、縣會議員、市長、代議士と次第に累進し改進黨から國民黨に至り、豐橋同志會を根據として勢力伸張と共に遠藤、大口の勢力は茲に勢力と我意の衝突を見るに至り、勢ひ遠藤は政友派の後援者となり一切の選擧は龍攘虎搏火の出る樣な激鬪を繰返へして、殆んど選擧地獄の觀を爲し人は機わ不識庵のそれにも比したるものがあつた。遠藤が病に倒るゝに及んで自然下火となつた。しかし對離的の立場は依然たるものであつたが、此合流を見るに及んで一變した。

憲政內閣より田中內閣

憲政會は希望通り單獨內閣を組織したものゝ自黨だけでは議會を乘り切るだけの頭數は無く政友本黨は又政友會と提携して政權爭奪を策したものゝ豫期に反して加藤高明に大命の再降下を見たので、議會の解散を怖るゝこと甚だしく苦悶の狀態であつた。此狀勢を見た愛知縣代議士三輪市太郎は多年の政敵ではあるが、鄕地を同じくする關係から加藤高明と一種の緣故が殊に護憲內閣時代には感情も頗る融和して首相官邸にも出入して居たので、加藤首相と本總裁床次竹次郎との間を斡旋して、暮夜窃かに會合せしめて提携を策した。之が次第に具體化して大正十四年十二月二十六日に開會した第五十一議會の劈頭全院委員長、各常任委員を始じめ特別委員長選擧に當り、委員長は憲政會と政友本黨に於て全部を占有した。之を見た政友本黨中の政友會との提携派中橋德五郎、鳩山一郎、木下謙次郎、吉植庄一郎、高橋光威、田邊熊一、廣岡宇一郎及び貴族院の鈴木喜三郎、水野錬太郎等は本黨を脫して同交會を組織し大正十五年一月二十日議會再開を動機に政友會に復歸した。

總理大臣加藤高明は苦節十年漸くにして單獨內閣の首班となつたが、議會再會間も無く病に罹つた。罹つたと言ふよりは疾に罹つて居たのを剛情我慢の例の氣象で押通して來たのであるが、政務多端、過勞過疲の結果病は昂進した。それにも屈せず毎日議會に出て答辯の衝に當つて居たが、元氣無く迫力無く低聲無力又當年剛堂の氣慨は無かつたが、一日答辯を了へ大臣席へ復せんとする時ひよろ〳〵として將さに倒れんとし、他の大臣に支持されて僅かに復席することが出來たが、翌日より靜養し內務大臣若槻禮次郎を臨時首相代理とした。他に宇垣財部など先任者が有るにも拘はらず若槻內相を代理としたのは政黨內閣として當然の處置であつた。それから間も無く二月二十八日に至り加藤首相は病革まり薨去したので、內閣組織の大命は床次、田中など相當氣構へて居たが若槻禮次郎に降下し、前內閣を繼承し政友本黨との聯繫を緊密にし、聯立內閣を造るべく床次と協議したが話は纏まらず物別れとなつた。若槻と床次とは帝大時代の學友として交情は他の人達よりも密であつたが、政友分裂以來政機を逸し政界ルンペンの歷史を繰返へして居た政本に對し憲政全然の今日、多く讓ることの出來なかつたのと第一內務を希望して居る床次の意圖は滿たされないのが、不調の主因で有つたらう。若槻內閣は濱口雄幸を內務大臣に早速整爾を大藏大臣に、井上匡四郎を仙石法相の辭任後鐵道大臣に、町田忠治を農林大臣と爲し、早速首相薨去後商工の片岡直溫を大毀大臣に、前衆議院議長の藤澤幾之輔を商工大臣として內閣補強工作を行つた。

大正天皇の崩御

大正十五年十二月二十五日午前一時二十五分　大正天皇には葉山御用邸に於て崩御遊ばされ天日爲めに明を失ひ國民は悲想に鎖された。

若槻内閣は相當人材を並べた樣であるが、不祥事件が續發した。宰相は陰陽を理し四時を調べ萬民をして其所を得せしむるの大德を有さなければならぬ。それが無くして功利才辨の小刀細工で天下を樊理し樣とすると不祥事件が續發する。桂内閣がそれであり、若槻内閣がそれであつた。

朴烈文子事件といふ樣な馬鹿な事件も此時であつた。朝鮮に於て秘密結社を檢擧した時、朴烈事件が擧つて來た。朴烈本名は朴準植といふ不逞鮮人で、露國の虚無主義に陷いり容易ならざる不逞計劃を陰謀するに至つた。山梨縣生れで高等學校を卒業した金子文子といふがあり、之が父母の無慈悲に育成して忠孝否定といふ樣なねじれた思想となり、倫落の女と爲つて居る内に東京で朴烈と知り合ひになりねじれた同志の意氣相投じて東京府下富ケ谷に一戸を構へ同棲して不逞計畫を進めて居たことが朝鮮秘密結社檢擧に依り端緒を得、朴烈文子は檢擧せられたが自白せず、係り立松豁審判事も持て剩して種々溫情を以て誘導し審理中紅茶を與へたり、兩人を控室に置いて家人を滿足せしむべき機會を與へたり、甚しきは家人蜜の如き情景の撮影を判事自から爲して其寫眞を與へ終に事實を告白せしめた苦心慘澹の程は思ひ遣らるゝが、其寫眞を朴烈が獄外の知人し送つた所から外間に漏れ居つて其司法の威信に關する非常識法外の行爲が暴露するに至つて國民非藏の焦點となり、殊に政友會は武器として内閣彈劾の具に供するに至つた。

更に司法事件として松島事件が勃發した。松島遊廓移轉は大阪市年來の懸案であつたが大正十四年其移轉運動渦中に前選信

大臣憲政會元老で君子人と言はれて居た箕浦勝人、政友會の總務岩崎勳、政友本黨幹事高見之通が關係し、苦し紛れの政黨費や箕浦の如き僅かに五萬圓といふ謝禮を貰つて内務大臣に若槻禮次郎に運動し、其内諾を得たといふ樣な事實が三派に聯繫した贈　事であるが、若槻首相や床次木堂總裁が否認した結果は、詐僞横領罪を構成するに至り箕浦と高見は有罪、岩崎は自分獨りで引受け、他に迷惑を掛けなかつたが非憤終に獄中に病死するに至つて終焉を告げた。

箕浦は若槻の否認を憤慨し若槻首相を相手取り僞證罪の告訴を提起するなど聽爭に礁、紛爭を加へて尾崎學堂の如きは宰相道の爲め若槻の辭任を勸告したが、引くに引かれぬ立場として若槻は應じなかつた。

第五十一議會閉會後政友會と政友木堂黨とは提携して若槻内閣に對抗態度を執つた。

昭和元年十二月廿六日開會の第五十二議會に於て二年一月九日再開勞頭に於て政友と木堂は聯合して政府不信條案を提出した。政府は三日間の停會を奏請し解散は不可解と見做されて居たが、若槻首相は衆議院控室に於て田中政友總裁、床次木堂總裁に會見を求め、新帝即位の早々の折柄特に兩總裁の和協を懇請し、後に三政黨の首領として左の覺書を以て和協を協定した

覺　書

新帝政治ノ初メニ當リ互ニ政治ノ公明ヲ望ムヲ以テ、今後ハ各自黨員ヲ嚴ニ戒飾シテ言論ヲ愼ミ、益々國民ノ議會ニ對スル信賴ヲ厚クスルコトニ努力スベシ

極めて曖昧模糊の申合せであるが、申合の底には何等か政治的了解が有つたであらう。從つて不信案も撤回し解散も無く無事に豫算案の通過を見、重要法案を決議したが、裏面に於て遞相安達謙藏は本黨の神田清兵衛と會見し左の覺書を作成し提携を策した。

覺　書

一、滿堂一致結束シテ鞏固ナル盟約ヲ爲シ以テ政局ノ安定ヲ維持スルコト

一、臨時政務調査を設置シ重要政策ヲ協定スルコト
一、次期選擧ニハ相互ノ地盤ヲ協定シ聯盟候補ノ必勝ヲ期スルコト

昭和二年三月二十日貴族院修正の豫算案政友會提出の大藏大臣片岡直溫處決案を議するに當り臨時軍事費決算討議に際し清瀨一郎が田中義一が陸軍大臣當時、西伯利出兵機密費二千百餘萬圓に言及するや、政友會議員憚起して多數演壇に殺到し暴力を揮ひ清瀨及び田崎信藏を負傷せしめた椿事突發し、暴力議員を告訴したので、議長粕谷義三、副議長小泉又次郎は責任を負ふて職を辭し、議長に憲政會の森田茂、副議長に本黨の松浦五兵衛が當選した。

財界動搖

第五十二議會に於て政府は財界整理の下に震災手形損失補償法案、震災處理法案を提出した。此二法案は一部財閥救濟案であつたので、兒島二郎、吉植庄一郎、岩切重雄等が極力反對したので大藏大片岡直溫は震災手形の銀行救濟を爲さなかたから一般國民に及ぼす影響は更に大なるものがあると答へ、兩結果に關係した追加豫算委員會に於て吉植庄一郎の追及益々急で神戸の鈴木商店關係の銀行手形を明示せよと迫つた。片岡藏相は之を明示したら財界に動搖を起すこと必定だとて其一例として渡邊銀行が去十四日前後支拂を停止した。之は資金を調達して再開したと言つた此一言が財界大動搖の動機とならんとは多少財政經濟に通じて居るとて凡庸の徒に政局を擔當せしむるの危險を例示した大事例であつた。神經過敏なる財界は忽ち電擊雷應して東京に於ける中井、左右田。七十四、中澤、村井各銀行は忽ち取付に逢つて休業の餘儀無きに至つた。

之に驚いた政府は臺灣銀行のコール回收、鈴木商店救濟の緊急勅令案を奏請し、樞密院へ諮詢となつたが、憲法第七十條の場合とは全然相違すとて十九對十一を以て否決した。若槻内閣は十七日總辭職を爲した。

田中内閣の成定

四月十九日内閣組織の大命は政友會總裁田中義一に降つた。高橋是清内閣立往生以來六年目で政權は政友會に來たのである翌日閣員を定めて奏上し昭和二年四月二十日を以て田中内閣は成立した。

之より先き銀行取付の動搖は次第に波及して停止する處を知らず、政府は二億七百萬圓を金融市場へ放資したるのみならず東京市内に於ける各銀行の臺灣銀行に對するコール二億圓を日本銀行に肩替はりせしめ、政府が保證したのであるが四月十八日に至り臺灣銀行も休業し、大阪一流銀行近江銀行も休業するに至つた。斯かる動搖の眞つたゞ中に田中内閣は成立し直に高橋是清を起して大藏大臣と爲し整理の衝に當らしめた、高橋藏相は議會の財政通を以て知られた豐橋選出政友會代議士大口喜六を擧げて大藏政務次官とした。田中内閣成立の翌二十一日には宮内省の金庫と目されて居た第十五銀行が休業した。斯くて東京、大阪、名古屋、京都、神戸を始じめ全國到處取付騷ぎが起り、愛知縣に於ては尾三銀行、額田銀行が休業した。之が爲め全國の銀行は一齋に二十二、二十三兩日休業し、廿四日は日曜なので三日間の休業後政府は二十五日より向ふ三週間緊急勅令を以てモラトリアムを斷行し、其期間に於て臨時議會を召集し、財界救濟對策を議した。全國の休業銀行三十餘行、預金總額九億圓に達して居た。財界救濟の諸議案議決せられ一般鎭靜狀態に復せるを見て大藏大臣高橋是清は使命を果せりとして辭任し、文部大臣三土忠造を後任に推薦し文部大臣には貴族院の水野錬太郎が就任した。

最初の普通選擧

田中内閣下に行はる

憲政會は本黨の一部無所屬と合して軍新倶樂部を組織したが、更に黨則政策を協定して、昭和二年六月一日新黨を組織し民政黨と稱した。此處に政友、民政兩大黨の對立を見、英國式に行けば兩黨交代政局を擔當し圓滿に大政翼賛の實を擧げ得べき筈であるが、唯闘志滿々政權爭奪に熱中せる兩黨は政策の如何よりは他の缺點剔抉の泥仕合に終始し、自から墓門に赴くを知らなかつたのは我が國憲の政爲め千秋の恨事であつた。

諒闇明けの第五十四議會は昭和三年一月二十一日休會明けの議場に於て民政黨總裁濱口雄幸外二十七名が署名を以て內閣不信任決議案を提出し、多數を以て可決したが、政府は之に同意を與へず實業同志會の武藤山治は衆議院解散決議案を提出したが、最少數で否決せられた。總理大臣田中義一は堂々たる快辯を揮つて一切の　策を羅列し內外施政方針演說を爲し續ひて大藏大臣三土忠造が財造演說を爲し終るや內閣書記官長鳩山一郎、解散の詔勅を捧げ來り反對堂々一言半句を押むの餘地無く解散を斷行した。於此手我が國最初の普通選擧法は實施されることゝなり、昭和三年二月二十日を以て第十六回總選擧を施行した。

愛知縣の選擧區

明治二十四年以來施行し來つた選擧區は小選擧制であつたが、之を大選擧區に改正し、名古屋市を除くの外三　國を通あて一選擧區と爲した所が、さて大選擧區になつて見ると地區を廣く、人も多く其運動上の勞力と費用とは莫大の數に上つて到底遣り切れないので、市は全部獨立選擧區とし、郡部は當初の區域よりも更に小地域の小選擧區と爲した。斯樣に小區域になると縣郡會議員程度の範圍を少し大きくしたに過ぎないので、代議士の選擧としては小に失し適當で無い感があるので普通選擧法實施に際し大選擧區制と小選擧區制の中間を取り、所謂中間選擧區の制と爲した。愛知縣に於ては

第一區　名古屋市　定員三名　　第二區　愛知、東西春日井、知多の五郡　定員三名
第三區　一宮、丹羽、葉栗、中島、海部の一市四郡　定員三名
第四區　岡崎市、碧海、幡豆、東西、加茂の一市四郡　定員三名
第五區　豐橋市、南北設樂、寶飯、渥美、八名の一市五郡　定員三名

と爲した。

東三豐橋、一市五郡の逐鹿

第五區豐橋市、南、北設樂、寶飯、渥美、八名は選擧人七萬六千二百十三名で往時に比し三倍の增員である。選擧費用と運動員の制限各戸訪問禁止等に依り運動は主として言論戰に屬する外無く、ポスター、立看板、文書戰等新戰術は一般に攻究され選擧運動上面目を一新したとは言ふものゝ潛行運動即ち訪問に依る運動請托買收、若くは運動ブローカーの闇取引など所在に行はれたことは勿論のことで取締の嚴密に行はれたのは手續上の煩　の問題に過ぎない觀があつた。

之より先き政友會本部に於ては普通選擧は言論戰に依るの外無しとし、全國各支部より優秀なる青年辯士を拔擢して本部に於て講習會を開き田中總裁から地方遊說員を囑託し以て對普選運動の準備を調べたのであるが、政友會愛知支部長大口喜六は三河部から近藤鹿堂を推薦したのであつた。

第五區に於ける大口喜六は選擧期日公布と同時に選擧事務所を吳服町に設け黑柳清次を事務長とし、言論部を本隊と別働隊に分ち本隊には大口自身加はり、北設樂の山岳部は安藤角次郎、八名方面は矢野實次、渥美郡は神戸小三郎擔當して一絲紊れぬ陣容を以て散兵戰を進めた。前回の選擧に大口と激戰した鈴木五六は　黨の離合集散の結果今は大口喜六と同じ政友會員であるので剃人馬首を駢べて陣頭に立つことゝなり、兩派協議の上互ひに地盤を侵さないことゝし、相當擁扶持して他候補に當ることゝした。政友系には五六の外に先輩近藤壽市郎があり、是亦立意滿々たるものがあつたが、吉原祐太郎、榊原辯吾等熟議の末近藤は謙讓の値を以て五六に讓ることゝなり、事實その事務長は榊原之に當り、近藤は青年辯士を統率して言論戰に當り五六の爲めに奮鬪し總裁田中總理大臣及び政友會に復歸した床次竹次郎等陣中見舞として豐橋に來り大に激勵した。

民政黨は加藤六藏を擁立し非政友の地盤として金城湯池の觀ある寶飯の大根據地に蟠居し本部を前芝に設け豐川の權田蕃、鹽津の杉浦兵吉篠東の中村又藏等を部隊長とし事務長は北川丈吉之に當り言論部としては豐橋から大場恒次郎丸地古城等進出し應援大に努めた。

民政黨は又渥美郡の杉浦武雄を出馬せしめ前田桂次郎事務長として豐橋の長尾俊、大澤松次郎等參加し、八名郡選出縣會議員加藤正衞亦八名方面を擔當し杉浦の爲めに背水の陣を布いて渥美八名を席卷せんとするの觀を呈した。

更に寶飯郡の新人鬪士鈴木正吾は前回の失敗に屈する無く兄龜藏を事務長として尾崎學堂の來援を得て寶飯渥美の各地に於て長廣舌を揮ひ勤勞階級並に青年層に對する魅力頗る强きものあり、同郡の加藤六藏に取つては後門の狼であつた。

未だ曾て代議士を出したことの無い南北設樂は之を以て終生の恨事と爲すことに於て識者界級はいづれも感を同じくする所であつたが、青木孝義が突如として立候補を宣するに及んで二郡は狂喜して之を見て有志を擧げて盡戰するに至つた。

青木は南設樂郡東鄕村大字矢部の產で帝大卒業後獨逸に留學し歸朝後は私大學の敎授として經濟學は特に其專攻に屬し學識共に優秀の新人であつた。而かも時流に投ずる經濟國策に關する堂々たる雄辯は到處風靡せざるは無き觀があつたが、如何せん人口稀薄の南北設樂を根據とし寶飯渥美の人口稠密なる大平原地盤のみ進出する餘力無く數の問題に於て到底大口杉浦等の敵では無かつた。選擧の結果は政友大口喜六、鈴木五六民政杉浦武雄の當選を見て加藤、鈴木、青木は落選した。

大口は明治二年五月生れの五十九歲、鈴木は明治十六年十一月生れの四十六歲、杉浦は明治二十三年五月生れの三十九歲であつた。

西三一市五郡の激戰

一市五郡の第四區は民政派前代議士武富剛、岡本實太郎の二人、政友派小林錡、準政小笠原三九郎、純中立山崎延吉の五人の對立で前代議士として相當の地盤を有する武富、岡本の兩派は大勢上有利の立場に在り兩派は相提携し協調して同志打を避け、武富は刈谷を中心として碧海幡豆岡本は猿投の鄕里を根據として東西加茂額田に進出し必勝陣を張つた。

政友派新候補者小林は西加茂郡擧母の人日本大學の敎授としての新人で東西加茂より碧海幡豆へかけ自由黨以來の系統に依り言論戰に依り戰線を張つたが東京生活に終始し鄕國に關係の無い點に於て不利を免がれなかつた。

準政の小笠原は幡豆郡室場村出身の實業家として臺灣反金の一人であつた。當時政黨所屬を明かにせず準政を見られて居たのは有利では無かつた。

山崎延吉

純中立の山崎延吉は安城農林王を以て知られて居る農村敎育指導者の巨頭、加賀百萬石の藩士の家に生れ愛知縣農林技師となり安城農林學校創設當時より多年一貫育英と農村開拓の塾業に從事し荒草地碧郡を一變して日本の丁抹の名を博するまでに

造り上げたのは山崎の力多きに居ることは周知の事實である。

安城農林學校出身縣下到處に散在各郡農會の技手は總て同校出身者ならざるは無き現狀に在つたので山崎先生出馬の報に接した門下生は郡在歡呼して之を迎へ先生候補者は各地の引張凧となつて手も足も出ない程の大旋渦の內に捲き込まれたので到處無敵の大優勢を以て西三を風靡したことは當然過ぐる程當然の經過で眞の理想候補者であつた。

開票の結果は山崎延吉、武富劑、岡本實太郎の當選を見、小笠原三九郎、小林錡は落選した。

山崎は明治六年六月生れ五十六歳、武富劑は明治十三年四月生れ四十九歳、岡本は明治十四年六月生れの四十八歳であつた

愛知縣

定員　十七名　候補者　三十四名

第一區　（名古屋市）　定員　五名

當　田中善立　（民政）　（二五、〇二〇）
當　小山松壽　（民政）　（一六、八八七）
當　加藤鐐五郎　（政友）　（一五、七三四）
當　鬼丸義齊　（民政）　（一〇、八四一）
當　椎尾辨匡　（中立）　（一〇、六九一）
次　瀨川嘉助　（政友）　（八、八六四）
　　横山一格　（民政）　（七、六六一）
　　今堀辰三郎　（民政）　（七、二三五）
　　村山爲章　（民政）　（四、三五二）
　　山崎常吉　（勞農）　（三、四三二）
　　岩越謹一　（實）　（一、七六六）

第二區　（愛知、東西春日井、知多）　定員　三名

當　久野尊資　（民政）　（一五、八二九）
當　西　脇晋　（民政）　（一五、六三三）
當　丹下茂十郎　（政友）　（一四、三二八）
次　山田佐一　（政友）　（一一、一九四）
　　清水市太郎　（政友）　（五、五四八）

第三區　（一宮、丹羽、葉栗、中島、海部）　定員　三名

當　瀧　正雄　（民政）　（二二、四二〇）
當　三輪市太郎　（政友）　（一七、九九三）
當　加藤鯛一　（民政）　（一六、四九八）
次　服部英明　（民政）　（九、六三二）

第四區　（岡崎、碧海、幡豆、額田、西加茂、東加茂）　定員　三名

當　山崎延吉　（中立）　（一九、七七一）
當　武富　劑　（民政）　（一八、四〇六）
當　岡本實太郎　（民政）　（一五、六九六）
次　小林　錡　（政友）　（一一、五八七）

小笠原三九郎　（政友）　（一〇、七六八）

第五區　（豐橋、北設樂、南設樂、寶飯、渥美、八名）　定員　三名

當　大口喜六　（政友）　（一四、一六七）

當　鈴木五六　（政友）　（一二、〇八六）

當　杉浦武雄　（民政）　（一〇、二五一）

次　鈴木年吾　（革新）　（八、八四一）

加藤六藏　（民政）　（八、四四〇）

青木孝義　（政友）　（五、三九三）

明治二十三年以來政戰二拾餘年選擧解散又解散四年の任期を無事に經過したのは二期か三期に過ぎなかつた程解散の連發に終始した三河に於ける先輩代議士中内藤魯一、田中六藏、今井磯一郎、早川龍介、築山和一、鈴木麟三、鈴木友治郎等いづれも故人となり時代と共に代議士の顏觸れも次第に後進の士に代つて來たのを見をべしである。

田中内閣倒るる

田中内閣の手で施行した、總選擧は政友會二百十九名民政黨二百十七名僅かに二名の差であつた。隨つて無産黨の八名、明政會の六名、革新倶樂部の三名實業同志會の四名無所屬の九名合計三十名が朝野與黨のオヤスチングボートを握つて居るので議員の爭奪戰は猛烈を極めた。

田中内閣は第五十四議會に於て早くも創痍を受けた、それは尾崎行雄の提出した内務大臣鈴木喜三郎の選擧干渉に關する彈劾案が議會を通告したので鈴木内相は議會開會中に辭職した。之が田中内閣に龜裂の這入つて最初である。

尾崎の彈劾案は單に鈴木内相の糾彈に止まらず『三大國難決議案』といふ一般的大警告であつて最も時弊堂弊に的中したものであるが政權爭奪に無中になつて居る政民兩派議員には禪坊主のつれが政黨解消、經濟機構一變、戰時體制實施の今日になつて考へて見れば眞に暗夜の警鐘であつたのだ。

三大國難決議案

（一）　思想的國難に關する決議

今や帝國の國難は思想、政治、經濟の諸方面より襲來し、今にして匡救の策を講ぜずんば明治大帝の遺業或は失墜せんことを虞る。此秋に當り端なく共産黨事件の勃發を見たるは眞に國家の最大不祥事なり。之を焚理する道は細心の注意を要す。國法に背ひて共産主義を實行せんとする者の罪科は素より責罰せざる可からずと雖も此の如き思想を醞釀發育せしむる所の環境も、亦之を改善せざる可からず。凡そ朝野兩黨共に政權爭奪に沒頭して國家内外の政務を懈怠したるが如き、租税の徵課分配其道を誤つて不合理的貧富の隔絶を招けるが如き、救恤恩給獨り官吏に厚くして人民に薄きが如き、勞資關係其の宜しきを失して産業界の秩序を壞亂せるが如き爲政家怠慢の致す所にして、而かも惡思想發育蔓延の素因ならざるは無し、素因を排除し環境を改善せずして單に刑罰のみに由つて惡思想を撲滅せんと欲さるも到底其目的を達する能はざることは古今内外事蹟の證明する所。微證歷々彼に獨露に在り。之如何なる惡思想と雖も立法的手段に依つて之を實行せんとする氣習を養成すれば安全辯を設けて爆發の危險を豫防すると同樣の効果無しとせず。

此の如き思想運動の發育蔓延に對しては歷代内閣均しく其責を免るゝ能はず、獨り現内閣のみを責むべきに非ざるも、本院は玆に左の三事を決議し、相共に謹慎恐懼の情を表せんとす。

一、共産黨事件に對し政府が刑罰のみを以て之に臨むは不可なり。宜しく其の環境を改善するの途を講ぜざるべからず。

一、本事件の檢擧を以て政府が手柄顏せんとするも不可なり。當事者は須らく謹愼して罪を聖明に謝し、國民に謝せざる可からず。

一、議會も亦謹愼恐懼の情を表すべし、斷じて本事件を以て黨略的に利用し、紛擾の端を滋くすべからず。

右決議す

（二）　政治國難に關する決議

政黨の弊、動もすれば國政の公平を失し、憲政の發達を妨げ、殆んど底止する處を知らず。

本院は左の諸事項を決議し匡救の端を開かんとす。

一、選擧は立憲政治の根本にして　天皇陛下によつて以て民意の所在を察知し給ひ、又以て萬機公論に決するの遺訓を繼承し給ふの途、一に懸つて玆に在り、然るに歷代の內閣やゝもすれば君國の爲めに奉仕すべき事務官を誘惑して私黨の爪牙に供し以て輿論民意の公正なる發露を妨害す。これ一は以て　陛下の聰明を擁蔽し奉り、一は以て民意の暢達を抑塞する所以にして、淵臣の非違實にこれより大なるはなし。普通選擧法實施の初頭に當り、內務大臣は選擧に干涉し、言論を抑壓し、暴力の橫行を看過し、幾多の非違を犯すに至つては君國に對する罪蹟實に深大なりとす。故に本院は將來此の如き非違を再現せしめざることを期す。

二、事務官はすべて位置保證を與へ、以て選擧干涉の根源を杜絕し、將來再び此の如き汚點を我が憲政史上に印する無からしめんことを期す。

三、貴衆兩院議員を兼ぬることを許すところの政務官を設置したるは、その目的一に事務官を永久官と爲し內閣の交替にかゝはらず、その職に安居して、國家必要の事務を執らしむるに在り、然るに歷代の內閣やゝもすれば政務官と事務官の區別を混亂し事務官に向つて黨派的任免を爲す。これ綱紀紊亂の根源にして、その弊害は歐米諸國の夙に實驗せるところ、しかし諸國皆その弊に堪へずしてこれを革正したり。

本院は事務官にして苟も黨派に偏倚するが如きものは悉く之を罷免し、代ふるに純忠無私の能吏を以てせんことを望む

四、警察權を以て選擧の自由に干涉するは不正の甚だしきものなり。嚴に之を杜絕せざるべからず。之が爲めには司法警察權を地方長官より取り去り之を檢事に專屬せしめんことを期す。

五、議員選擧の費用はその公表を强制しながら却つて之が供給者たる政黨の經費を秘密にすることを許すは、本末輕重の區別を顚倒するものなり。加之黨費の收支を秘密にするは賄賂請託の本文にして、政黨の腐敗財閥の跋扈政治の紊亂多くはこれに基因す。故に本院は一定の形式により政黨の收支計算を公表せしむべき法律を制定せんことを期す。

右決議す。

（三）　經濟國難に關する決議

近時經濟組織の變遷は、帝國經濟の有機的發達を阻害せんとすの惧あり。本院は左の決議を爲し匡救の端を開かんことを期す。

一、擧國一致を以て儉約勤勉の實を擧げんが爲め政府が先づ豫算歲出に大節約を行ひ之を以て國民の負擔輕減及び其他の社會事業に充當すべし。

二、剩餘金は旣定計劃に充當するものを除き、之を減債基金に繰入れるを本則とし、之に必要なる法律の改正を行ふべし。

三、生產の能率と分配の正義との要求を調和する爲め產業を統制するの計劃を樹て以て國民生活の安定を期すべし。

四、社會政策的見地より稅制の整理を行ひ階級負擔の調和を計るべし。

五、第三、第四項の爲めに政府に於て調査會を設置すべし。

右決議す。

此決議案は内相彈劾を含むが故に民政黨始め多數の贊成を得て議會を通過したが、其他は當時の情勢に迂なるもの位に考へて居たで有らう。哲人の言は到底凡俗政治家政黨員等の額に入るものでは無い。

此決議案は鈴木内相の選擧干渉を糾彈し其處決を望むといふのであつたが、田中首相は英斷を以て内相をして辭任せしめたので決議案は前記の如く字句を修正して衆議院を通過したのである。

尾崎行雄等は此程度に於て田中内閣の反省を促すに止むる意圖であつたが、民政派は遮二無二肉薄して中野正剛の如き張作霖事件を剔抉して臆面も無く世界列國の前に暴露して、帝國の面目に泥を塗ることを顧色せず、政黨の泥仕合も此に至つて沙汰の限りで政黨自から墓穴を堀りつゝあつた醜態亡狀國の上下を擧げて顰蹙せしめたのであつたが、衆議院に於ては僅かの多數で否決し去つたが、貴族院に於ける民政派は再び作霖事件及び文部大臣水野錬太郎優諚問題を蒸返し、樞密院に於ては不戰條約を米國流に人民の名に於て宣言せんとするは、我が國體を無視するものであるとて難關に逢着し辛ふじて條件附可決を見たが、張作林事件の奏上に就いて首相と陸相の奏上に齟齬あり首相も進退を決するの外無く、昭和四年六月二十八日の閣議を最後として七月二日に至り總辭職を爲し即日組閣の大命は民政黨總裁濱口雄幸に降下した。雄幸は暫時の御猶豫を乞ひ僅かに八時間にして組閣の人選を終へ奏上し同夜親任式は行はれ、濱口内閣は出現した。

田中總裁の死と犬養

昭和三年八月一日床次竹次郎は對支外交、思想問題、財政緊縮、金解禁の四大政策を解決すると聲明書を發して民政黨を脱し一族郎黨を率ひて新黨倶樂部を組織したが、當然床次と進退を共にすべく思惟された小橋市太、松田源治、田中隆三等は泣いて別れを告げ民政黨に居殘つた。

濱口内閣は小橋市太を文部大臣に、松田源治を拓務大臣に推薦し入閣せしめたので政界の夢遊病者床次も其意外の成行に醒然として覺醒する處あり、七月六日無條件でた友會に合同するの外無く末路蕭條の觀を爲したのは人がよいだけに氣の毒であつた。

濱口内閣の時に至りて田中内閣當時に行はれた幾多忌はしき事件が暴露した。賞勳局長の賣勳事件、小が平等の鐵道事件、山梨朝鮮總督の五萬圓事件等々醜穢汚濁の疑獄續出して政友會の受けた打擊は大なるものがあつた。

濱口内閣は政友内閣の財政々策を放漫なりとして極端なる緊縮節約政策を取り金の輸出禁止を斷行して財界の建て直しを急いで居つたが、政友會總裁田中義一は地方官會議の爲め上京した知事連をを紅葉館に招待し歡を盡した其夜別邸に於て卒然薨去した。或は挾心症なりと傳へ或は頸動脈を切つて自殺したり、紅葉館の宴は別宴なりしなりなど浮說紛々眞僞知るべからざるも屈出は病死であつた。政友會は政界と會を斷ち閑地に在つた犬養毅を起して總裁とした。嘗ては改進黨の鬪士として自由黨と猛敢なる電擊戰を試みに來た人が二人あつた。一人は尾崎幸雄二回政友會に入つて總務となつた。一人は犬養毅全然政界の大隱居として政塵の外に悠遊自適の閑生活に甘んじて居たのであるが、今引張り出されて政友會の總裁となつた。政界の曲折と世波の倒瀾とがかういふ成行になる處に運命の惡戲か奚理の妙味かゞ思はれる。此時床次は既に復歸して政友會に在り六年前分裂せず、泰然自若として政友會に居たら疾くに總裁にもなり首相にもなつたであらうが、横田千之助の勇敢力行の遺り方に不恢と不安を抱ひて脱黨した結果、政界ルンペンを繰返へし若槻内閣の時政友會に復歸すべき好機會が有つたにも拘はらず之を斷行し得なかつたのは松島事件の惡緣を握つて居る一種の威壓が之を斷行し兼ねたかの觀もあり、一度び中心を失ふてそれからそれと行ふ處機會を失し此時も當然總裁のお鉢は廻はるべき運命に對して第一に反對したのは鈴木喜三郎、次は中橋德五郎と久原房之助で終に何の希望も持つて居なかつた犬養の處へ轉んで往つたのであつた。

濱口内閣と總選擧

昭和五年一月二十一日第五十七議會休會明けの劈頭に於て濱口内閣は突如議會の解散を奏請した。其理由は左記の通りであるが選擧の神とまで言はれて居た内務大臣安達謙藏は府縣知事の大更迭を斷行し、水も洩さぬ其布陣は一擧にして大多數を制し得べき確信を持つて居たのである。第五十六議會で大多數を以て可決した尾崎提出の建議案と全然反對の事務官の惡用を其直下に行ふべき陣立であるのだから憲政も何も有つたものでは無く眼中只政權爭奪あるのみの政情に墮したことは政黨世紀末の光景で、山雨將に臻らんとして風堂に滿つるものである。山雨とは何か政黨解體の鐵槌で歩一歩其運命を辿りつゝあつたことは政民兩黨共に同一過程の趨勢であつた。

議會解散理由

現内閣ハ衆議院ニ於テ少數黨タル民政黨ヲ基礎トシ、政友會ハ絶對多數ヲ擁シテ反對ノ地位ニ立テルガ故ニ、諸般ノ政策ヲ施行スルニ故障多キノミナラズ、現在ノ如ク政局ヲ長ク不安定ノ狀態ニ置クハ國家ノ爲メ憂慮ニ堪ヘザル處ナリ。加フルニ總選擧ニ依ラズシテ獲得シタル不自然ナル絶對多數ハ國民總意ノ反映ニアラザルヲ以テ、此際衆議院ノ解散ヲ奏請シ、新ナル總選擧ニヨツテ信任ヲ國民ニ問フハ現内閣ノ取ルベキ當然ノ處置ナリト信ズ。政友會ハ其大會ニ於テ公明ナル襟度ヲ以テ政府ノ提案ヲ檢討スベシト宣言シタルモ、元來民政黨トハ根底ヨリ其主義政策ヲ異ニセル政友會ガ現政府ヲ支持スルモノニアラザル事極メテ明瞭ナルガ故ニ現在ノ政情ヲ以テシテハ到底國務ヲ圓滿ニ運用スルコト能ハズ、コレ現内閣ガコヽニ立憲的手段ヲ取リ國民ノ判斷ニ訴フルニ至レル所以ナリ。

斯くて昭和五年二月二十日を以て第十七回總選擧を施行した。解散を斷行した濱口内閣は選擧に依り絶對多數を制すべき確信を持つて居た。それは内務大臣安達謙藏が全國の知事部長を率ひて選擧に臨むに於て多數を制し得べき自信を豪語して居た、それが濱口内閣の確信を有した根底である。

斯くと見た犬養政友總裁は老軀を提げて東奔西走、濱口内閣と一戰を交ゆることゝなつた。「犬養か濱口か」「景氣か不景氣か」のスローガンは選擧場裡に高く揭げられ所在殊死して戰つたのである。

西三河の角逐

愛知縣第四區西三一市五郡に於ては民政黨前代議士岡本實太郎と武富濟が再起し、我が黨内閣の下に堂々の陣を張り候補者の亂立を警しめた處に選擧巧者の面影を見せて居る。之に對して政友會は定員三名に對し岡田菊次郎、小林錡、小笠原三九郎の三人が立つたので戰はずして既に苦戰の形勢を示して居た。

岡田菊次郎は明治二十三年以來内藤魯一の爲め終始し惡戰苦鬪を續け來つた老勇士で、地方に對する功績亦少なからざるものがあつたが、如何せん時代は既に過ぎ去つた觀があり、小笠原三九郎は海外に進出し事業界の傑士であるが、鄕國には多く知られず、唯新進の學究にして雄辯家である小林は二回の敗戰を重ねて次第に地盤を開拓し、老練にして政府特別保護下の岡本、武富と相拮抗して輸贏を爭ひ得るの立場に在つた。開票の結果は岡本、武富、小林の當選となつた。

岡本實太郎

明治十四年六月二十五日西加茂郡猿投村大字龜首に生れ、明治法律學校卒業後判檢試驗に及第し司法官として各地裁判所に勤務し、大藏省に轉じ熊本坂出金澤廣島の專賣局長となり退職後辯護士となり代議士たること五回、後農林參與官となり正五

位勳三等に叙せられた。此時五十一歳である。

小林錡

明治二十一年三月三日西加茂郡高橋村大字寺部に生れ、青山師範學校卒業後日本大學に入り大正十二年獨逸に留學を命ぜら れ、伯林大學に於て政治法律經濟學を修め昭和元年歸朝司直の府に入り東京地方裁判所檢事となり、日本大學に教鞭を取り退官後同大學の法科部長となる代議士たること前後三回、勳四等に叙せらる。此時四十四歳であつた。

東三河の激戰

東三一市五郡の第五區に於ては政友會では大口喜六と近藤壽市が立候補を宣したるに對して、民政黨は杉浦武雄と加藤六藏とが轡を並べて出馬し、准政の青木孝義亦再び打つて出で、革新倶樂部の鈴木正吾は寶飯郡を根據として豐橋渥美に進出し、定員三名に對し六名の出馬は次第に競爭劇甚を加へ敵味方入り亂れて混戰亂鬪を演ずるに至つた。選擧は敵は元より競爭者であるが味方も亦相互競爭者として統制の限界無く遂鹿の苦心は其處に存するのである。

嘗て師弟の關係上殊に同じく非政友の候補者として大口は杉浦の爲めに當時區制の關係上選擧關係の無かつた渥美郡の根據地を杉浦に讓り、誘擁指導に努力したのであつたが、今や渥美郡も豐橋市も同一選擧區となり、杉浦とは反對黨として角逐するに際し、一度び渡した根據地は再び返り來らざるの苦整を嘗むるに至つて政戰も亦一種の悲劇である。殊に此選擧中に杉浦派の運動員伴力藏なる者演壇上に於て大口を誹毀して刑事問題を惹起し、信用毀損罪で有罪となつたが如き出來事迄生ずるに至つた。

近藤派は舊自由派を中心として豐橋に於ては同黨の大口派と巧みに接觸を保ちつゝ根據地田原赤羽根始め渥美全部に猛運動を試むると同時に豐川右岸に進出し玆に加藤派との間に白兵戰を演ずるに至り犧牲者をも出すに至つた。

一方加藤派は多年先代六藏代議士が占據した大根據地であるにも拘はらず、大正三年の選擧に於て一人の選出も見ず全部豐橋の大口、鈴木派の杉浦の爲めに優勝されたる苦き歴史に鑑み寶飯全郡の士氣自から敵愾心を昂起せしめた上に加藤派の同情に訴へた哀訴戰術は巧みに選擧心理を攫みて奏功少なからず、新進氣鋭の鈴木正吾は青年層の人氣は回一回昂揚して渥美半島に於ては頗る優勢の觀を爲したが根據寶飯に於ては加藤派の哀訴戰術に壓倒さるゝを免がれず、青木孝義に至つては依然南北設樂の山岳地を死守するの外寶飯渥美の平野に進出するを得ず、殊に北設は大口派の爲めに侵略せられ形勢更に振はず開票の結果第一位杉浦武雄、第二位加藤六藏、第三位大口喜六の順序にて當選、此所にも民政黨が如何に政府黨としての恩典に浴し巧妙なる自黨擁護の功を奏したかが思はれる。

加藤六藏

東三の名士曲型的好紳士代議士加藤六藏の長男として明治二十四年十二月の生れ、此時四十一歳、豐橋中學卒業後慶應大學理財科に入り卒業して歸村、村長たること數年、郡縣會議員を經て大正十三年五月三十四歳で代議士に當選し、今回は二回目の當選である。東三農漁村發展に貢獻した功績に至つては遺がに名家の後たるを思はしめ前途を囑望されて居る。

選擧の結果は豫定の如く政府黨の大勝に歸し民政黨は解散前に比し一躍百名を增し二百七十三名の絶對多數を得、政友會は六十三名を減じ百七十三名となり、無産黨五名、國民同志會六名、革新黨三名、無所屬五名となつた。

政友會大敗の原因は續出せる疑獄に依り信を國民に失つたにも因るが、其他に多く人に言はれて居ない原因が在る。之は政策に關するもので、事業界に於ては積極政策を謳歌して居たが一面に於て恩給生活者、俸給生活が貨幣價値の低下即物價騰貴の爲め生活上の壓迫を受けたことは非常なもので、民政黨の消極政策に多大の希望を持つたことが選擧界の大勢に影響したこ

とは甚大であつた。景氣か不景氣のスローガンは直ちに其處に逆効果を奏したことは最も皮肉の風景であつた。

愛知縣

定員　十七名　候補者　三十一名

第一區（名古屋市）　定員　五名

當　今堀辰三郎（民政）（二七、三五〇）
當　小山松壽（民政）（一六、九〇九）
當　瀬川嘉助（政友）（一五、七九五）
當　石川久兵衛（民政）（一五、五一八）
當　加藤鎌五郎（政友）（一一、五一七）
次　田中善立（中立）（一〇、三四二）
　　柾尾辨匡（中立）（九、三七四）
　　荒谷宗二（大衆）（五、六三二）
　　村山爲章（民政）（四、九二二）
　　服部崎市（民政）（三、七〇八）
　　齋藤貢（中立）（二、六八二）
　　井上初太郎（中立）（二、六一九）

第二區（愛知、東西春日井、知多）　定員　三名

當　藍川清成（民政）（一九、七九六）
當　西脇晋（民政）（一八、九六九）
當　丹下茂十郎（政友）（一七、〇七一）
次　安藤孝三（中立）（九、九一六）
　　今井喜一郎（中立）（二、〇一一）

第三區（一宮、丹羽、葉栗、中島、海部）　定員　三名

當　服部英明（民政）（二〇、一八四）
當　加藤鯛一（民政）（一九、九六一）
當　瀧正雄（政友）（一四、九九〇）
次　田中貞二（政友）（一一、一〇三）

第四區（岡崎、碧海、幡豆、額田、東西加茂）　定員　三名

當　岡本寶太郎（民政）（二五、九三三）
當　武富濟（民政）（二二、八六一）
當　小林錡（政友）（一七、一三六）
次　岡田菊次郎（政友）（一五、一四七）

第五區（豐橋、寶飯、渥美、八名、南北設樂）　定員　五名

當　杉浦武雄（民政）（一五、三六六）
當　加藤六藏（民政）（一四、八九〇）
當　大口喜六（政友）（一一、二六七）

次　鈴木正吾　（中立）　（九、二七七）
近藤壽市郎　（政友）　（八、八七二）
青木孝義　（中立）　（二、七二五）

犬養内閣

總選擧に絶對多數を得た濱口内閣は其消極的緊縮整理の政策を實行した。之は俸給生活者恩給生活者の期待した處であるが同時に不景氣は來た。不景氣に附隨するものは各種營業者の因恒と失業者の續出である。かうした範圍の人の數は俸給生活者や恩給生活者の數に比すれば更に大群である。濱口政策は世間一般より呪はれる樣になつた。端なくも濱口首相は東京驛頭に於て佐鄕屋なる。一青年の爲めに狙擊されて腹部に重症を負ふた。

其重症後健康未だ回復せざるにも拘はらず濱口首相は病軀を無理に議會に臨んで說明の衝に當つた。之は自殺する樣なものであり、與黨政治家間係より見れば强ひて見殺しにした樣なもので、死を屠しての行動であつた。濱口首相は果して終に殪れたので後繼首相として若槻禮次郎が推選され大命降下して第二次若槻内閣を組織したのは大昭六年四月十四日であつた。間も無く大藏大臣井上準之助、財界の巨頭團琢磨が暗殺され、外務大臣幣原喜重郎が暴客に毆打され、總理大臣若槻禮次郎は脅迫狀蝟集の焦點となつた。

政界には一種の暗流と險波が流れ始めた。それは議會に倦み議會政治に愛想をつかし、政黨政治の墮落腐敗に憤慨した愛國思想勃發の地心熱が噴火孔を求めつゝ震動を始め出したのであつた。

此難局に堪へず内務大臣安達謙藏は若槻首相に勸めて政界革新を斷行すべく政友會の久原房之助等と氣脉を通じ、實行に着手せんとしたが、若槻首相優柔不斷にして依惟決せず終に十二月に至り外部の壓迫に堪へず行倒式の總辭職を爲し内閣組織の大命は政友會總裁犬養毅に降り、昭和六年十二月十三日犬養内閣は成立した。

其二十六日に第六十議會は開會されたが、開會式當日不敬事件が突發した。權兵衞内閣の議會開會式當日大不敬事件起り當時犬養遞相は首として總辭職說を主張したと傳へて居たので、今回も亦當然責任を帶びて桂冠するものと豫想して居たが、犬養首相は優詔に對し奉りて、退ひて骸骨を乞ひ奉るより進んで其職に留りて臣節を盡すことが忠なる所以で有るとして留任したので多少の批判を加へられた。

そして昭和七年一月二十一日休會明けの議會劈頭に於て與黨少數にして政局不安定なるを理由として議會の解散を奏請し同二月二十日を以て總選擧を施行すべく公布された。

東三河の形勢

愛知縣第四區南北設樂寶飯渥美八名豐橋の一市五郡に於ては、政友會は大口喜六と近藤壽市郎を公認した。始め吉原祐太郎が立候補を宣したが、奥美郡有志は近藤の屢ば出馬して未だ一回も當選の榮を得ざるに同情し是非共近藤推薦すべく猛運動を開始し、吉原も亦多年近藤の努力に負ふ所大なるを思ふ遂に出馬を見合し、近藤に讓ることゝなり、近藤敢然陣頭に立ち熱烈な猛運動を開始した。

大口は大藏政務次官の閲歷を有し、多年苦節を共にしたる犬養首相の關係は他と類と異にし、隨つて逐鹿界に於ける人氣は斷然他を壓するものあり、殊に兩設を地盤として數同候補者に立つた青木孝義は今日は立候補を斷念し、大口の爲めに焦頭爛舌言論戰を以て熱援を爲したので、大勢は靡然として大口に歸する觀を呈するに至つた。之に反し杉浦武雄は足達に隨つて國

民同盟に入り民政黨を脱したので、一般人氣は前回の如く集中せず民政黨愛知縣支部は縣會議員加藤正衛の名に依つて聲援檄を飛ばしたが政友内閣の下に在つて總選擧とて野黨の悲哀を滿喫するの外は無かつた。

民政黨の加藤六藏も亦形勢振はず回一回人氣を加へ來つた鈴木正吾の爲めに壓迫せられ、先代六藏の餘光も長くは續かず、大口、近藤、鈴木の順位を以て當選し加藤、杉浦は落選の失意を見た。

西三河の變勢

西三河東、西加茂、額田、碧海、幡豆、岡崎の一市五郡は政友二名民政二名四つに組んで健闘善戰、四を以て定員の三を爭つた。即ち政友は小笠原三九郎と小林錡、民政は岡本實太郎と武富劑を公認し、いづれも必勝を期したが前回と異なり政友派の老將岡田菊次郎は出馬しなかつたので、政友民政全く互角の角逐を試み小笠原、小林、武富の順位を以て當選し、前回の最高點岡本實太郎は落選した。此處にも我が黨内閣の効果を現はして居るが、景氣要望の大勢も影響して居ることは言ふまでも無い。

小笠原三九郎

明治十八年四月五日幡豆郡室場村大字花藏寺に小笠原長左衛門の三男として生れ、此四十八歳、東大法科出身にて臺灣銀行支店課長、華南銀行專務を經て南洋印度を視察すること五年、昭南鑛業社長、極南捕鯨、スマトラ拓殖、南洋鐵鑛業の監査役で南進日本の先驅として事業界に活躍しに居る。

愛知縣

定員　十七名

第一區　名古屋市　（定員　五名）

當　加藤鎌五郎　（政友）
當　小山松壽　（民政）
當　田中善立　（政友）
當　横山一格　（民政）
當　瀬川嘉助　（政友）

第二區　愛知、東、西春日井、知多　（定員　三名）

當　丹下茂十郎　（政友）
當　西脇晋　（民政）
當　山田佐一　（民政）

第三區　一宮、中島、丹羽、葉栗、海部　（定員　三名）

當　瀧正雄　（政友）
當　加藤鯛一　（民政）
當　田中貞二　（政友）

第四區　岡崎、碧海、幡豆、額田、東、西加茂　（定員　三名）

當　小笠原三九郎　（政友）

當　小林　錡　（政友）
當　武富　劑　（民政）

第五區　豐橋、寶飯、南、北設樂、渥美、八名　（定員　三名）
當　大口　喜六　（政友）
當　近藤　壽市郎　（政友）
當　鈴木　正吾　（中立）

岡田內閣

內閣總理大臣犬養毅が白晝首相官邸に於て射殺されたのは所謂五一五事件で、國際事變來の先驅として政黨打倒の犧牲として血祭に揚げられたのであつた。海軍大將齊藤實大命を拜して齊藤內閣を組織し、政黨を基礎とせざる內閣として公平中立惡く言へば瓢簞鯰式の圓滿主義を以て內外變理の衝に常り、昭和七年五月より同九年七月に至つたが、同月總辭職を爲し後繼內閣の主班として海軍大將岡田啓介組閣の大命を拜し、岡田內閣を組織し齊藤は內大臣に任ぜられた。

齊藤內閣の末期から岡田內閣成立常時は國際關係と社會情勢とは著しく變化し一面に於て倫敦に於ける海軍々縮會議には若槻禮次郎全權大使として出席し、不脅威不侵略の國防根本主義を强調したのであつが、英國と衝突し日本、英國、米國、獨逸伊太利の五大國會議に於て決裂を生じ、昭和九年一月十七日の脫退の通告を發した。同月二十一日休會明けの第六十八議會に於て政友會は海軍々縮會議全權の不信任案を提出し、島田敏雄提出案說明の任に當り犀利の快辯を揮つて說き來る間に議會溶散は奏請せられ午後三時十分議會解散の詔勅は降下し總選擧は昭和十一年二月二十日施行のことゝなつた。

總選擧と三河

第四區岡崎、碧海、幡豆、額田、東、西加茂の一市五郡は政友會は小林錡、小笠原三九郎の前代議士再起し民政黨は前代議士武富劑、前代士岡本實太郎、中立として新人三宅則羽出馬し定員三に對し五名の角逐は競走次第に激烈を加へ政友會支部長大口喜六は小林小笠原の爲めに屢々西三に乘り込み應援演說を試みたが、岡本實太郎、武富劑、小林錡の三人が當選を見、小笠原三九郎、三宅則羽は落選した。

第五區豐橋、寶飯、渥美、八名、南、北設樂の一市五郡は政友會は前代議士大口喜六、同近藤壽市郎出馬の外に民政黨は元豐川鐵道の常務であつた倉田藤四郎を擁立し、渥美郡田原町の株式仲買人內柴信吉が中立を標榜して名乘を揚げ、前代議士鈴木正吾、前々代議士杉浦武雄の六人入り亂れて混戰態狀となり、選擧廓淸囊に極めて緊張したる選擧競爭を試みたが開票の結果は

鈴木正呈、大口喜六、杉浦武雄

の三名當選し近藤、倉田、內柴は落した。

愛知縣

定員　十七名

第一區　名古屋市　（定員　五名）
當　服部　崎市　（民政）
當　瀨川　嘉助　（政友）

當　加藤鎌五郎　（政友）
當　小山松壽　（民政）
當　椎尾辨匡　（中立）

第二區　愛知、東、西春日井、知多　（定員　三名）
當　山田佐一　（民政）
當　丹下茂十郎　（政友）
當　服部英明　（民政）

第三區　一宮、丹羽、葉栗、中島、海部　（定員　三名）
當　瀧正雄　（政友）
當　加藤鯛一　（民政）
當　渡邊玉三郎　（民政）

第四區　岡崎、碧海、幡豆、額田、東、西加茂　（定員　三名）
當　岡本實太郎　（民政）
當　小林錡　（政友）
當　武富濟　（民政）

第五區　豐橋、寶飯、南、北設樂、渥美、八名　（定員　三名）
當　大口喜六　（政友）
當　鈴木正吾　（中立）

當　杉浦武雄　（民政）

終に爆發

岡田首相は齋藤前首相の甲乙一如内外無碍の大局に向つて方針を誤まらざる大乘主義を學んで得ず、前入後入左支右吾英決の明無く邁往の勇を缺き、晴後曇の國策、否、何等國策無く經綸無きに愛想をつかせる愛國武斷派の耐忍力は終に爆發炸裂して二二五事件となり、五一五事件に更に幾倍せる慘禍を見るに至り、齋藤内大臣、高橋大藏大臣、渡邊教育總監等擊殺され、鈴木侍從長は一度死して再生し、牧野伸顯、岡田首相は身を以て免がれ、以て今日に至れるなど我が國空前の出來事を生じ、後繼内閣は陸軍大將林銑十郎に降下し、林内閣は成立した。

第七十議の劈頭に於て寺内陸相と政友派代議士濱田國松の對立の如き事は小兒のそれに類した言葉遣ひの小問題に過ぎなかつたが憲政、政黨對非政黨主義の對立問題としては其處に重大なる意義の存することを見逃がすことは出來なかつたが、戰時豫算の鵜呑通過を見ると同時に突如議會解散の詔勅は降つた。

時は滿洲事變の突發、國際聯盟脱退等國際情勢の大變勢に隨應し急轉直下我が戰時體制と軍備充實とを要するの機運に際會したのであつた。

解散の理由

現下内外の情勢に對處して時艱克復、國運の伸張を期せんが爲めには正しき意味に於ける朝野協力によらねばならぬ。依つて政府は組閣早々議會に臨み誠意を盡して議案の成立を圖つたのであるが、最近衆議院に於ける審議の狀況は極めて誠意を缺き殊更に國防國民生活の安定に至大の關係ある重要法案の進行を沮み、緊切なる事務を滯滯せしめ果して重大なる時局を

認識し立憲の供獻翼賛の誠を表せるやを疑はしむるものである。議會刷新の急務の唱へらるゝ眞にゆゑなしとせぬ。即ち政府は此際國民の公正なる良心に訴へ、是非を天下に問ひ、以て帝國憲政の本務を顯現するの楷梯たらしむると共に此時期を於て國民の政治的自覺の確立を期待し、一致協力今日の時局に力を致さんことを望み、爰に止むを得ず議會解散を奏請した次第である。

昭和十二年三月三十一日

内閣總理大臣　林　銑十郎

斯くて同十二年四月三十日を以て第十九回總選擧を施行することゝした。選擧肅正の聲は全國的に高く、前回選擧に於て八名郡山吉田村の選擧違反容疑者中一人は刑務所に於て一人は釋清江縊首自殺を爲したので、人權蹂躙の叫びは喧囂を極めたのであるが、今次の選擧に際しては更に嚴罪、嚴罰主義の宣傳に脅かされ一種の干渉に非らざるかを疑はしめたが、與黨を有しない政府は何に依りて國民の信任を問ふの標準基礎と爲すかに就いても國民は其判斷に迷ふものがあつた。同時に憲政の危機といふ觀念は一脉選擧界に流るゝものがあつたが、多年習慣づけられ來つた選擧界の惡弊は洗滌さるべくと見へなかつた。

西三河第四區に於ては民政黨の重鎭と見做された武富濟が病氣の爲め物故したので、碧海、刈谷の大野一造と岡本實太郎が民政黨の公認候補となり、面目を新たにした。大野は屢々愛知縣會議員に當選し議長ともなり、縣下に重きを爲して居た。之に對し政友會は小笠原三九郎と小林爺を公認候補として奮鬪したが開票の結果は

大野一造、小笠原三九郎、岡本實太郎の順位で當選し小林爺は落選した。

東三河第五區に於てな政友會は大口喜六、近藤壽市郎を公認候補とし、民政黨は杉浦武雄、高橋小十郎を推して政友派に對抗し、鈴木正吾亦敢然出馬したが選擧の結果は

鈴木正吾、大口喜六、杉浦武雄

の順位で當選し、近藤は次點高橋は少數で落選した。

此選擧に於て渥美郡赤羽根村長大場禮吉は就任早々の事で手續不案内であつたが、選擧當日魚群の襲來に選擧人中網引に飛出し不在の爲め其息子が代つて投票した者の有つたことが發覺し、村長の責任上不正投票を爲さしめし者と認められ、嚴刑に處せられた事件などもあり、選擧法勵行の爲め手續問題で違反者と爲つた例は少なくなかつた。

愛知縣　定員　十七名

第一區　名古屋市　（定員　五名）

當　服部崎市　（民政）
當　山崎常吉　（大衆）
當　椎尾辨匡　（中立）
當　小山松壽　（民政）
當　塚本三　（民政）

山崎常吉違反失格の爲め

當　加藤鎌五郎　（政友）

第二區　愛知、東、西春日井、知多　（定員　三名）

當　丹下茂十郎　（政友）
當　樋口善右衛門　（政友）
當　安藤孝三　（中立）

第三區　一宮、丹羽、葉栗、海部、中島　（定員　三名）

當　渡邊玉三郎　（民政）

當　加藤鯛一　（民政）

當　瀧正雄　（政友）

第四區　岡崎、碧海、幡豆、東西加茂　（定員　三名）

當　岡本實太郎　（民政）

當　小笠原三九郎　（政友）

當　大野一造　（民政）

第五區　豐橋、寶飯、南、北設樂、渥美、八名　（定員三名）

當　大口喜六　（政友）

當　杉浦武雄　（民政）

當　鈴木正吾　（中立）

第二區　安藤孝三　第三區　渡邊玉三郎失格の爲め

當　服部英明　（民政）

當　內藤守正　（民政）

村松愛藏の死

他の前代議士等に比し最も長命で昭和十四年四月十一日八十三歳を以て昇天し、同五月十四日渥美田原國民學校に於て納骨式を行つた時友人總代として近藤前代議士の朗讀した弔辭は左の通りであつた。

故救世軍參軍元衆議院議員村松愛藏君ノ英靈ニ告グ

君ハ安政四年三月二日田原藩士村松家ニ生レ資性溫厚清廉英邁ニシテ八歳ノ時藩校成章館ニ入學漢學武道ヲ修メ十一歳ニシテ村松家ヲ嗣ギ十四歳ノ時豐橋ニ出デ英語塾ニ入リ十六歳　竹及ヲ東都ニ負ヒ初メ希臘正教會大主教ニコライ氏ニ後外國語學校ニテ露語ヲ學ビ　數年後退學シテ板垣伯ト民權論ニ共鳴自由黨ニ投ジ專ラ政治運動ニ沒頭セシガ終ニ藩閥政府ノ暴政ニ憤激シ君ハ首領トナリ直接行動ニ依テ政治革新ヲ圖ル可ク同志川澄德次八木重治ノ諸氏ト氣脈ヲ通ジ擧兵ヲ策シテ未前ニ發覺シ明治十八年國事犯トシテ禁錮七年ニ處セラル　飯田事件即チ之ナリ明治廿二年二月十一日　憲法發布ニ際シ大赦ノ恩典ニ浴シ出獄明治廿九年四月板隈內閣ノ際日露外交ノ紊來ヲ慮リ亞細亞、トルコ、ロシヤ等ヲ漫遊、明治三十一年第十二議會ニ愛知縣第十一區ヨリ初メテ代議士か選出セラレ益々政治界ニ活躍ス　代議士ニ當選スルコト前後四回、明治四十二年立憲政友會本部常務幹事タリシ際日糖事件ニ連座シ五ヶ月ノ禁錮ニ處セラル　同年十二月刑ノ執行ヲ終ルヤ翻然悟ニ處アリテ救世軍ニ入營ヲ申出デ翌年一月三日救世軍一兵士トシテ入隊同年九月救世軍士官學校ニ入リ明治四十四年五月見習　大尉ニ任ゼラレ京橋岡山横濱ノ各小隊長ヲ歷任　大正二年少校ニ昇進　大正二年五月一日ヲ以テ司法大臣松田正久氏ヨリ復權狀下付セラル　同三年救世軍本營社會部人事相談部主任トナル　大正八年中校ニ同十五年參軍ニ昇進　昭和四年停年ヲ超ユルコト數年ニシテ隱退シタルガ現役ヲ去リタル後ト雖モ一日モ自己ノ使命ヲ忘リタル事ナク眞ニ宗教家トシテ將又政治家トシテ一大偉人ニシテ其功績大ナルモリアリタルガ不幸疾魔ノ冒ス處トナリ療養看護怠ラザリシニモ拘ラズ靈天ニ歸シテ復タ還ラズ洵ニ痛恨ノ情ニ堪ヘズ然リト雖モ君ガ八十三年ノ生涯ニ於テ盡サレタル功績ヤ永ク後生ニ輝キ千古滅セズ君以テ瞑スベシ

本日茲ニ君ノ納骨式ニ際シ不肖友人ヲ代表シ滿腔ノ熱誠ヲ以テ恭シク哀悼ノ意ヲ表ス

在天ノ英靈尙クハ來リ饗ケヨ

昭和十四年五月十五月　　友人總代　動四等　近藤壽市郎

近衛内閣と現勢

選擧の結果林内閣の與黨としては、幾何も無く依然既成政黨政友民政の兩黨が大勢力であるので何等意義を爲さず、昭和十二年六月を以て退閣し第一次近衛文麿内閣は出現し支那事變の勃發と共に内外を通じ其經綸と巨腕とを期待されたが、同十四年一月に至り總辭職を爲し樞密院議長平沼騏一郎内閣、同十四年八月陸軍大將阿部信行内閣、同十五年一月海軍大將米内光政内閣の成立を見たが、それも時運と國民の期待に添ふの力量無く昭和十五年七月に至つて第二次近衛内閣成立、政黨はいづれも自發的に解黨し、明治新政歐米依存政策と共に發育した政黨の解消を見、同時國民總體の大政翼贊會の成立を見たのは明治維新の新政に次ぐの大更新で我が憲政史に一段階を劃するものである。

今や日獨伊三國樞軸の成立、獨ソの開戰、日本の支那大半の攻略膺徴、南京政府肢、我が佛印進出大軍の派と共に日獨伊對英米ソの對立世界大勢はいづれか一に歸して新世界を現出すべき步調自から明白なるものがあり、大東亞共榮環右の方西伯利より、左の方スエズまで海峽に至る我が大日本帝國の指導下に屬すべきこと必然の運命と見られて居るが、樞軸對米洲の問題は依然次代に殘さるべき問題で有らう。

衆議員に於て當時に内藤魯一の建議した憲政功勞者表彰に關し尾崎行雄始め二十五年議席に在りし人に表彰し、嘗ては邪魔者扱ひに爲した尾崎を憲政の神、議會の守護神に祭り上ぐるに至つゝが時に既に過信過去の歴史の一片影に過せない所に歴史の悲哀に感ぜしむ叙し來つて見るはれ或は政黨の罪惡史の觀すら晨過の印象たるを免がれないが、併し嘗ては德川家康が二百六十年間封建樹立の功罪史と同じく國家の發展に資した重大なるもの有ることは否認し後なんで有らう。我が國家に於けるる國民的訓練が議會史政黨史に依らずして今日までの整備統が訓練發達を見ることが出來たかどうか、憲政の光輝と共に其脚光内の大なる一役で有つたことは言ふまでも無い。

附錄

歴代内閣の壽命

内閣	成立	存續期間		
一次 伊藤	明治一八・一二・二二	二年四月八日	二次 西園寺	四四・八・三〇
黑田	二一・四・三〇	一年七月廿四日	三次 桂	大正元・一二・二一
一次 山縣	二二・一二・二四	一年四月十二日	一次 山本	二・二・二〇
一次 松方	二四・五・六	一年三月二日	二次 大隈	三・四・一六
二次 伊藤	二五・八・八	四年一月十日	寺内	五・一〇・九
二次 松方	二九・九・一八	一年三月廿四日	原	七・九・二九
三次 伊藤	三一・一・一二	五月十八日	高橋	一〇・一一・一三
一次 大隈	三一・六・三〇	四月八日	加藤(友)	一一・六・一二
二次 山縣	三一・一一・八	一年十一月十一日	二次 山本	一二・九・二
四次 伊藤	三三・一〇・一九	七月十三日	清浦	一三・一・七
一次 桂	三四・六・二	四年七月五日	一次 加藤(高)	一三・六・一一
一次 西園寺	三九・一・七	二年六月七日	二次 加藤(高)	一四・八・二
二次 桂	四一・七・一四	三年一月十六日	一次 若槻	一五・一・三〇
			田中	昭和二・四・二〇

一年三月廿一日	
二月	
一年一月廿六日	
二年五月廿三日	
一年十一月廿日	
三年一月十四日	
七月	
一年二月廿日	
四月五日	
五月四日	
一年一月廿一日	
五月廿八日	
一年二月廿日	
二年二月十二日	

濱口　四・七・二　一年九月十二日　林　一二・二・二　四月二日
二次若槻　六・四・一四　八月　一次近衛　一二・六・四　一年七月
犬養　六・一二・一三　五月十三日　平沼　一四・一・五　七月廿五日
齋藤　七・五・二六　二年一月十二日　阿部　一四・八・三〇　四月十七日
岡田　九・七・八　一年八月　米内　一五・一・一六　六月六日
廣田　一一・三・九　十月廿四日　二次近衛　一五・七・二二　現在

政黨一覽表

黨名	創立年月	主腦者	備考
愛國公黨	明治七年正月十二日	福島種臣等	
立志社	明治七年三月廿八日	板垣退助	
愛國社	明治十一年四月五日	板垣退助	
自由黨	明治十四年十月廿九日	板垣退助	
改進黨	明治十五年三月十四日	後藤象二郎	
立憲帝政黨	明治十五年三月十八日	福地源一郎	
保守中正黨	明治廿一年十一月十九日	丸山作樂	
大同倶樂部	明治廿二年十月二日	鳥尾小彌太	
公友倶樂部	明治廿二年十二月十五日	大江卓等	
		高田早苗	
		高木正年	

再興自由黨　明治廿二年十二月十九日　大井憲太郎
愛國公黨　明治廿二年十二月十九日　板垣退助
關西自由黨　明治廿二年十二月二十日　片岡健吉
庚寅倶樂部　明治廿三年五月十五日　大井憲太郎　板垣退助
大成會　明治廿二年八月二十日　杉浦重剛等
立憲自由黨　明治廿三年八月廿五日　板垣退助
國民自由黨　明治廿三年十二月廿一日　八木原繁祉等
自由倶樂部　明治廿四年二月廿五日　片岡健吉　林有造
協同倶樂部　明治廿四年二月廿八日　末廣重恭　大江卓
巴倶樂部　明治廿四年十一月中
獨立倶樂部　明治廿四年十一月中
獨立倶樂部　明治廿五年四月廿五日　岡崎運兵衛　佐々田懋
中央交渉會　明治廿五年四月中
國民協會　明治廿五年六月廿五日　西郷從道　品川彌二郎
東洋自由黨　明治廿五年八月二日　大井憲太郎
同盟倶樂部　明治廿五年十一月廿三日　鈴木重遠
同志倶樂部　明治廿六年十二月四日　長谷場純孝　小林樟雄
帝國財政革新會　明治廿七年三月廿三日　田口卯吉

愛國公黨、再興自由黨、大同團結派合同
自由黨脱黨組
大成會、自由黨の一部
大成會、無所屬の一部
舊大成會及同志の新選議員

中國進步黨	明治廿七年四月三日	犬養毅	同盟、同志兩倶樂部合同
公同倶樂部	明治廿七年四月二十日	鈴木重遠	
立憲革新黨	明治廿七年五月三日	長谷場純孝	
大手倶樂部	明治廿七年十月中	大竹貫一等	對外硬舊大日本協會派の無所屬
同忘會	明治廿八年六月廿八日	末廣重泰 志賀重昂	
進歩黨	明治廿九年三月一日	大隈重信	改進、革新、中國進歩、財政革新、大手各派合同
議員倶樂部	明治廿九年十二月中		無所屬議員の一部
國民倶樂部	明治三十年正月八日	中村彦次 大島信	國民協會脫黨組
丁酉倶樂部	明治三十年正月八日	田村順之助 中村克昌	自由黨脫黨組
實業同志倶樂部	明治三十年正月廿七日	原本善三郎 松重太郎	
新自由黨	明治三十年二月廿八日	田村順之助 重野謙次郎	
國民黨	明治三十年十二月廿二日	中江篤介	
同志會	明治三十年十二月二十日	長谷場純孝	
山下倶樂部	明治廿一年五月七日		
憲政會	明治廿一年六月廿二日	大隈重信 板垣退助	自由黨、進歩黨合同
憲政本黨	明治廿一年十一月三日	大隈重信	憲政會より分裂
帝國黨	明治廿二年七月五日		國民協會の後身

立憲政友會	明治廿三年八月廿五日	伊藤博文 西園寺公望	
三四倶樂部	明治廿四年二月十八日	大東義徹等	憲政本黨より分裂
壬寅會	明治廿五年十月九日		
同志倶樂部	明治廿五年十二月五日		
中正倶樂部	明治廿六年四月中		
政友倶樂部	明治廿六年七月七日	尾崎行雄 小田貫一	政友會より分裂
交友倶樂部	明治廿六年十二月六日	秋山定輔 大竹貫一	
甲辰倶樂部	明治廿七年三月十七日	服部小十郎等	中正、交友合同
無名倶樂部(同攻會)	明治廿七年三月十八日	河野廣中	
國民倶樂部	明治廿八年十二月二十日	鈴木重遠	
大同倶樂部	明治廿八年十二月廿三日	河野廣中 島田三郎	帝國、甲辰、自由、無所屬の各派合同
社交倶樂部	明治廿八年十二月廿九日		舊政交倶樂部所屬議員
猶興會	明治廿九年十二月中		主義を同うする新選議員
戊申倶樂部	明治四十一年七月廿五日		
又新會	明治四十一年十二月廿一日	河野廣中	憲政本黨、又新、無所屬合同
立憲國民黨	明治四十三年三月十三日		大同、庚申、無所屬合同
中央倶樂部	明治四十三年二月廿五日		

名	會		
無	明治四十三年二月十八日	入江武一郎等	
同志會（亦樂會）	大正元年八月廿八日		
政友倶樂部	大正二年二月廿三日	尾崎行雄	
立憲同志會	大正二年十二月廿三日	岡崎邦輔	
中正會	大正二年十二月廿四日	加藤高明	
公反倶樂部	大正四年十一月廿七日	尾崎行雄	政友會より脱黨
憲政會	大正五年十月十日	花井卓藏	
公正會	大正五年十一月中	加藤高明	
維新會	大正六年六月中		
新政會	大正六年十月中		
清和倶樂部	大正七年二月十五日		
正文倶樂部			
純正國民黨		湯淺凡平等	
庚申倶樂部			
革新倶樂部			
實業同志會		犬養毅、島田三郎、尾崎行雄	
政友本黨	大正十三年正月廿九日	武藤山治	
中正倶樂部	大正十三年五月三十日	床次竹二郎	政友會より脱退

新正倶樂部	大正十四年五月三十日	中橋德五郎	政友本黨より脱黨
同交會	大正十四年十二月三十日		憲政會、政友本黨合同
立憲民政黨	昭和二年六月一日	濱口雄幸	
革新黨	昭和二年六月三日	大關直彦	
明政會	昭和三年四月十六日	鶴見祐輔	
憲政一新會	昭和三年九月七日	田中善立等	民政黨より脱黨
新黨倶樂部	昭和三年八月九日	床次竹二郎	民政黨より脱黨
國策研究倶樂部	昭和七年七月一日	安達謙藏	民政黨より脱黨
國民同盟	昭和七年八月八日	安達謙藏	
昭和會	昭和十年	內田信也	政友會より分立
東方會	昭和十一年	中野正剛	

歷代愛知縣知事

氏名	出身地	就任年月	前官職	身分	學歷
間島久道	愛知縣	明治四年十一月	浦和縣知事	士族	
井關盛良	愛媛縣	明治四年十二月	宇和島縣參事	士族	
井關盛良	愛媛縣	明治五年四月	若松縣令	士族	
鷲尾隆聚	京都府	明治六年五月	若松縣令	士族	

安場保和	熊本縣	明治八年十二月	福島縣令	士族
國貞廉平	山口縣	明治十三年三月	愛知縣大書記官	士族
勝間田稔	山口縣	明治十八年一月	內務縣大書記官	士族
勝間田稔	山口縣	明治十九年七月	縣令ヨリ	士族
白根專一	山口縣	明治二十二年十二月	愛媛縣知事	士族
岩村高俊	高知縣	明治二十三年五月	石川縣知事	士族
千田貞曉	鹿兒島縣	明治二十五年三月	和歌山縣知事	士族
安場保和	熊本縣	明治二十五年七月	福岡縣知事	士族
時任爲基	鹿兒島縣	明治二十五年八月	靜岡縣知事	士族
江木千之	山口縣	明治三十年十一月	栃木縣知事	士族
沖守固	鳥取縣	明治三十一年十二月	元滋賀縣知事	士族
野村政明	鹿兒島縣	明治三十五年五月	石川縣知事	士族
深野一三	熊本縣	明治三十五年十月	福岡縣知事	士族
石原健三	東京府	大正元年十一月	北海道長官	東大法科明治二十二年
松井茂	廣島縣	大正二年三月	靜岡縣知事	東大法科明治二十六年
宮尾舜治	新潟縣	大正八年四月	關東都督府民政長官	東大法科明治二十九年
川口彥吉	宮崎縣	大正十年五月	熊本縣知事	東大法科明治三十二年
太田政弘	山形縣	大正十二年六月	新潟縣知事	東大法科明治三十一年

山脇春樹	京都府	大正十三年六月	栃木縣知事	東大法科明治三十二年
柴田善三郎	靜岡縣	大正十五年九月	福岡縣知事	東大法科明治三十七年
小幡豐治	千葉縣	昭和二年九月	德島縣知事	東大法科明治三十八年
岡正雄	島根縣	昭和四年七月	熊本縣知事	東大法科明治四十二年
香坂昌康	山形縣	昭和六年一月	岡山縣知事	東大法科明治四十一年
尾崎勇次郎	兵庫縣	昭和六年十二月	新潟縣知事	東大法科明治三十二年
遠藤柳作	埼玉縣	昭和七年六月	神奈川縣知事	東大法科明治四十三年、
三邊長治	富山縣	昭和八年七月	宮城縣知事	東大法科明治四十四年
篠原英太郎	長野縣	昭和九年八月	岡山縣知事	東大法科明治四十四年
田中廣太郎	東京府	昭和十二年二月	長野縣知事	東大法科大正二年
兒玉九一	山口縣	昭和十五年四月	福岡縣知事	東大法科大正八年
相川勝六	佐賀縣	昭和十六年三月	廣島縣知事	東大法科大正八年

歷代貴族院議員

蟹江史郎	(文政十年生)	明治二十三年六月=同三十年
瀧兵右衛門	(天保十四年生)	明治三十年六月=同三十七年
神野金之助	(嘉永四年生)	明治三十七年六月 同三十九年九月
小栗富治郎	(慶應二年生)	明治三十九年十二月=同四十年十一月

大　寶　陣（明治四年生）　明治四十年十二月＝四十一年二月
伊藤次郎左衛門（嘉永元年生）　明治四十一年五月＝同四十一年十月
岡谷惣助（嘉永四年生）　明治四十二年一月＝同四十四年一月
伊藤由太郎（明治五年生）　明治四十四年九月＝大正五年
鈴木惣兵衛（安政三年生）　大正五年十月同七年六月
磯貝浩（元治元年生）　大正十四年
森本善七（安政二年生）　大正十四年九月
下出民義（文久元年生）　昭和三年八月
下出民義　昭和七年九月
磯貝浩　昭和七年九月
松澤清次郎　昭和八年七月
磯貝浩　昭和十二年十月
下出民義　昭和十四年九月
磯貝浩　昭和十四年九月

歴代衆議院議員

明治二十三年六月第一回總選擧當選者

第一區　堀部勝四郎（文政十年十二月生）
第二區　永井松右衛門（嘉永六年十二月生）
第三區　梶田喜左衛門（嘉永三年一月生）
第四區　宮田愼一郎（安政元年三月生）
第五區　森東一郎（弘化四年十二月生）
第六區　青樹英二（天保十四年二月生）
第七區　端山忠左衛門（弘化二年十一月生）
第八區　早川龍介（嘉永六年八月生）
第九區　今井磯一郎（天保十二年正月生）
第十區　加藤六藏（安政五年四月生）
第十一區　鈴木麟三（嘉永五年二月生）

明治二十五年加藤政一死亡同二月補缺選擧

第六區　加藤喜右衛門（安政四年十二月生）

明治二十七年三月第三回總選擧當選者

第一區　國島博（弘化四年十二月生）
第二區　小室重弘（安政四年十二月生）
第三區　江崎均（安政四年三月生）
第四區　倉地伊右衛門（　　）
第五區　森東一郎（弘化四年十二月生）
第六區　加藤喜右衛門（安政四年十二月生）
第七區　天野伊左衛門（嘉永六年十二月生）
第八區　太田善四郎（弘化三年七月生）
第九區　今井磯一郎（天保十二年正月生）
第十區　加藤六藏（安政五年四月生）
第十一區　三浦碧水（天保十二年十一月生）

明治二十三年六月第一回總選擧當選者

第一區　堀部勝四郎（文政十年十二月生）
第四區　松山義根（天保十二年四月生）

明治二十五年二月第二回總選擧當選者

第一區　青山朗（嘉永元年六月生）
第二區　永井松右衛門（嘉永六年十二月生）
第三區　横井善三郎（安政三年八月生）
第四區　片野東四郎（弘化二年八月生）
第五區　森東一郎（弘化四年十二月生）
第六區　加藤政一（萬延元年四月生）
第七區　天野伊左衛門（嘉永六年十二月生）

明治二十七年九月第四回總選擧當選者

第一區　吉田祿在（天保九年九月生）
第二區　小室重弘（安政四年十二月生）
第三區　江崎均（安政四年三月生）
第四區　長谷川亀一郎（文久三年二月生）
第五區　伊藤春太郎（安政五年三月生）
第六區　鈴木仙太郎（安政二年十一月生）
第七區　天野伊左衛門（嘉永六年十二月生）
第八區　早川龍介（嘉永六年八月生）
第九區　今井磯一郎（天保十二年正月生）
第十區　小林仲次（元治元年三月生）
第十一區　山本三太郎（天保八年八月生）

明治三十年山本三太郎死亡同補缺選擧

第十一區　高橋小十郎（　　）

明治三十一年三月第五回總選擧當選者

第一區　鈴木惣兵衛（安政三年二月生）
第二區　小室重弘（安政四年十二月生）
第三區　堀尾茂助（文久元年九月生）
第四區　村瀨庫次（慶應二年五月生）
第五區　横井甚四郎（萬延元年十月生）
第六區　西川宇吉郎（嘉永六年二月生）
第七區　長坂重孝（嘉永元年十二月生）
第八區　鈴木友次郎（元治元年九月生）
第九區　浦野錠平（萬延元年十二月生）
第十區　加藤六藏（安政五年四月生）
第十一區　村松愛藏（安政四年三月生）

明治三十一年八月第六回總選擧當選者

第一區　鈴木惣兵衛（安政三年二月生）
第二區　井上信八（嘉永五年二月生）
第三區　堀尾茂助（文久元年九月生）
第四區　村瀨庫次（慶應二年五月生）
第五區　森東一郎（弘化四年十二月生）
第六區　西川宇吉郎（嘉永六年二月生）
第七區　長坂重孝（嘉永元年十二月生）
第八區　早川龍介（嘉永六年八月生）
第九區　浦野錠平（萬延元年十二月生）

第十區　加藤六藏（安政五年四月生）
第十一區　後藤文一郎（文久元年四月生）

明治三十五年八月第七回總選擧當選者

市部　服部小十郎（萬延元年三月生）
　　志水直（嘉永二年四月生）
郡部　横井甚四郎（萬延元年十月生）
　　早川龍介（嘉永六年八月生）
　　志賀重昂（文久三年九月生）
　　加藤六藏（安政五年四月生）
　　鈴置倉次郎（慶應三年三月生）
　　太田善四郎（弘化三年四月生）
　　川島松次郎（安政元年十一月生）
　　林小參（文久三年正月生）
　　福岡精一（安政二年四月生）
　　清水松三郎（文久二年五月生）
　　大道寺忠七（慶應元年九月生）

明治三十六年三月第八回總選擧當選者

市部　服部小十郎（萬延元年三月生）
郡部　鈴木惣兵衛（安政三年二月生）
　　村松愛藏（安政四年三月生）
　　太田善四郎（弘化三年四月生）
　　大池鎌次郎（明治元年十二月生）
　　横井甚四郎（萬延元年十月生）
　　志賀重昂（文久三年九月生）
　　早川龍介（嘉永六年八月生）
　　大道寺忠七（慶應元年九月生）
　　福岡精一（安政二年四月生）

明治三十七年三月第九回總選擧當選者

市部　鈴木惣兵衛（安政三年二月生）

服部小十郎（萬延元年三月生）
郡部武田千代定（安政六年七月生）
後藤文一郎（文久元年四月生）
林小參（文久三年正月生）
横井甚四郎（萬延元年十月生）
鈴木友次郎（元治六年九月生）
清水松三郎（文久二年五月生）
鈴置倉次郎（慶應三年三月生）
築山和一（慶應元年六月生）
福岡精一（安政三年四月生）
小林仲次（元治元年三月生）
村松愛藏（安政四年三月生）

明治三十八年清水松三郎死亡同十一月補缺選擧

内藤魯一（弘化三年十一月生）

明治四十一年五月第十回總選擧當選者

市部鈴木惣兵衛（安政三年二月生）
安藤敏之（慶應二年四月生）
郡部清水市太郎（慶應元年九月生）
横井甚四郎（萬延元年十月生）
鈴木仙太郎（安政三年十一月生）
築山和一（慶應元年六月生）
早川龍介（嘉永六年八月生）
福岡精一（安政三年四月生）
春田祐清（安政五年二月生）
鈴木友治郎（元治元年九月生）
内藤魯一（弘化三年十一月生）
村松愛藏（安政四年三月生）
鈴置倉次郎（慶應三年三月生）
後藤文一郎（文久元年四月生）

横井甚四郎、内藤魯一死亡補缺選擧

三浦逸平（明治三年一月生）
高濱與七

明治四十五年五月第十一回總選擧當選者

市部石黒盤（嘉永四年八月生）
安東敏之（慶應二年四月生）
郡部三輪市太郎（慶應三年四月生）

大口喜六（明治三年五月生）
森田小六郎（明治十年十二月生）
鈴置倉次郎（慶應三年三月生）
清水市太郎（慶應元年九月生）
田中善立（明治七年十一月生）
吉原祐太郎（萬延元年八月生）
春田祐清（安政五年一月生）
早川龍介（嘉永六年八月生）
三浦逸平（明治三年一月生）
福岡精一（安政三年四月生）

大正四年三月二十五日第十二回總選擧當選者

市部小山松壽（明治九年一月生）
磯貝浩（元治元年八月生）
郡部田中善立（明治七年十一月生）
大岩勇夫（慶應三年五月生）
小林仲次（元治元年三月生）
織田了（文久元年九月生）
大島久滿次（慶應元年九月生）
早川龍介（嘉永六年八月生）
伊藤義平（安政三年十月生）
鈴置倉次郎（慶應三年三月生）
三輪市太郎（慶應三年四月生）
森田小六郎（明治十年十二月生）
清水市太郎（慶應元年九月生）

大正六年四月第十三回總選擧當選者

市部小山松壽（明治九年一月生）
磯貝浩（元治元年八月生）
郡部瀧正雄（明治十七年四月生）
清水市太郎（慶應元年九月生）
三輪市太郎（慶應三年四月生）
小山溫（慶應元年八月生）
大口喜六（明治二年五月生）
奥村三樹之助（明治八年一月生）
日比野寛（慶應二年十一月生）
田中善立（明治七年十一月生）
堀尾茂助（文久元年九月生）

大島久滿次（慶應元年九月生）
鈴置倉次郎（慶應三年三月生）

奥村三樹之助辭職、大正七年五月十八日補缺選擧

大島宇吉（嘉永五年三月生）

大正九年五月第十四回總選擧當選者

市部　加藤重三郎（文久二年五月生）
小山松壽（明治九年一月生）
郡部　磯貝浩（元治元年八月生）
大口喜六（明治二年五月生）
手島鍬司（慶應三年九月生）
下出民義（文久元年十二月生）
田中善立（明治七年十一月生）
波多野喜右衛門（安政四年六月生）
山本清三郎（明治九年十一月生）
瀧正雄（明治十七年四月生）
三輪市太郎（慶應三年四月生）
清水市太郎（慶應元年九月生）
早川龍介（嘉永六年八月生）

齋藤鷲太郎（明治十五年三月生）
鈴置倉次郎（慶應三年三月生）
舞田壽三郎（明治十五年三月生）
吉原祐太郎（萬延元年八月生）
加藤紋右衛門（明治十七年五月生）
千賀千太郎（明治十五年十一月生）

大正十三年五月第十五回總選擧當選者

市部　小山松壽（明治九年一月生）
田中善立（明治七年十一月生）
郡部　加藤鍬五郎（明治十六年三月生）
大口喜六（明治三年五月生）
近藤重三郎（明治十九年六月生）
松山兼三郎（明治七年十一月生）
鈴置倉次郎（慶應三年三月生）
丹下茂十郎（明治十三年八月生）
加藤鯛一（明治廿一年六月生）
服部英明（明治十二年三月生）
三輪市太郎（慶應三年四月生）

清水市太郎（慶應元年九月生）
武富濟（明治十二年四月生）
岡本實太郎（明治十四年六月生）
浦野謙朗（明治十五年三月生）
加藤六藏（明治廿四年十二月生）
杉浦武雄（明治廿三年五月生）
西脇晋（明治十五年一月生）

昭和三年二月第十六回總選擧當選者

第一區　田中善立（明治七年十一月生）
小山松壽（明治九年一月生）
加藤鍬五郎（明治十六年三月生）
鬼丸義齋（明治十九年九月生）
椎尾辨匡（明治九年七月生）
第二區　久野尊資（明治十五年一月生）
西脇晋（明治十五年一月生）
丹下茂十郎（明治十三年八月生）
第三區　瀧正雄（明治十七年四月生）
三輪市太郎（慶應三年四月生）
加藤鯛一（明治廿一年六月生）
第四區　山崎延吉（明治六年六月生）
武富濟（明治十三年四月生）
岡本實太郎（明治十四年六月生）
第五區　大口喜六（明治三年五月生）
鈴木五六（明治十六年十一月生）
杉浦武雄（明治廿三年五月生）

昭和五年二月第十七回總選擧當選者

第一區　今堀辰三郎（明治十年九月生）
小山松壽（明治九年一月生）
瀨川嘉助（明治十三年五月生）
石川久兵衛（明治二年六月生）
加藤鍬五郎（明治十六年三月生）
第二區　藍川清成（明治五年四月生）
西脇晋（明治十五年一月生）
丹下茂十郎（明治十三年八月生）
第三區　服部英明（明治十二年三月生）
加藤鯛一（明治廿一年六月生）

瀧　正雄（明治十七年四月生）
第四區　岡本實太郎（明治十四年六月生）
武富　濟（明治十三年四月生）
小林　錡（明治廿一年三月生）
第五區　加藤六藏（明治廿四年十二月生）
杉浦武雄（明治廿三年五月生）
大口喜六（明治三年五月生）

昭和七年二月第十八回總選擧當選者

第一區　加藤鎌五郎（明治十六年三月生）
小山松壽（明治九年一月生）
田中善立（明治七年十一月生）
横山一格（明治十三年三月生）
瀬川嘉助（明治十三年五月生）
第二區　丹下茂十郎（明治十三年八月生）
西脇晋（明治十五年一月生）
山田佐一（明治十九年七月生）
第三區　瀧　正雄（明治十七年四月生）
加藤鯛一（明治廿一年六月生）
田中貞二（明治十四年二月生）
第四區　小笠原三九郎（明治十八年四月生）
小林　錡（明治廿一年三月生）
武富　濟（明治十二年四月生）
第五區　大口喜六（明治三年五月生）
近藤壽市郎（明治三年四月生）
鈴木正吾（明治廿三年六月生）

昭和十一年二月第十九回總選擧當選者

第一區　服部崎市（明治卅二年五月生）
瀬川嘉助（明治十三年五月生）
加藤鎌五郎（明治十六年五月生）
小山松壽（明治十三年三月生）
椎尾辨匡（明治十四年二月生）
第二區　山田佐一（明治十九年七月生）
丹下茂十郎（明治十三年八月生）
服部英明（明治十二年三月生）
第三區　瀧　正雄（明治十七年四月生）
加藤鯛一（明治廿一年六月生）

渡邊玉三郎（明治十七年一月生）
第四區　岡本實太郎（明治十四年六月生）
小林　錡（明治廿一年三月生）
武富　濟（明治十二年四月生）
第五區　大口喜六（明治三年五月生）
鈴木正吾（明治廿三年六月生）
杉浦武雄（明治廿三年五月生）

昭和十二年四月第二十回總選擧當選者

第一區　服部崎市（明治卅二年五月生）
山崎常吉（明治十四年一月生）
椎尾辨匡（明治九年七月生）、
小山松壽（明治九年一月生）
塚本三（明治廿二年四月生）
第二區　丹下茂十郎（明治十三年八月生）
樋口善右衛門（明治九年三月生）
安藤孝三（明治卅一年五月生）
第三區　渡邊玉三郎（明治十七年一月生）
加藤鯛一（明治廿一年六月生）
瀧　正雄（明治十七年四月生）
第四區　岡本實太郎（明治十四年六月生）
小笠原三九郎（明治十八年四月生）
大野一造（明治十八年四月生）、
第五區　大口喜六（明治三年五月生）
杉浦武雄（明治廿三年五月生）
鈴木正吾（明治廿三年六月生）
第一區　加藤鎌五郎（明治十六年三月生）
第二區　服部英明（明治十二年三月生）
第三區　内藤守正（明治十二年四月生）

歷代縣會議員（三河）

明治十二年五月ヨリ十三年十月

村上忠淨（碧海）　太田佐兵衛（同）　村上補　近藤坦一平（同）　副

早川龍介（同）近藤補、副
木俣周平（幡豆）
神尾彦四郎（額田）
杉田多十郎（西加茂）
柴田東八郎（東加茂）
岡崎千鞆（同）田澤補
加賀守之助（南設）
大原紋三郎（同）丸山補
武田準平（同）議長
及部豊吉（同）竹内補
山本八郎（同）

明治十四年一月＝十五年十月

太田佐兵衛（碧海）
神谷小八郎（同）早川補
内藤魯一（同）石川補
深谷半十郎（同）郡副
深田三太夫（額田）
石橋重則（同）近藤補

大野定（同）
深谷半十郎（同）
近藤東右衛門（額田）
大澤重喜（同）
鈴木利十郎（同）柴田補
村松六郎（北設）
原田彦九郎（南設）加藤補
大林重三郎（寶飯）
三好太一（寶飯）武田補
服部彌八（渥美）
深井九郎三郎（八名）

大野定（碧海）
岩間新右衛門（同）神谷補
太田善四郎（幡豆）常置
鳥山清吉（同）深田補
加藤善八郎（同）
齋藤廣治（同）

志賀喜代三郎（幡豆）
鳥山清吉（同）深谷補
齋藤廣治（同）
今井磯一郎（同）大澤補
田澤多賀吉（同）
後藤治郎八（北設）
丸山久太郎（同）
中尾十郎（同）中尾補
竹内傳八郎（同）
原田萬久（渥美）
村上清平（八名）

早川龍介（同）大野補、副議長
石川八郎治（同）
岡田希信（幡豆）
犬塚清藏（同）鳥山補
近藤東右衛門（同）
中川與八郎（同）齋藤補

杉田多十郎（西加茂）郡副、常置
太田七重郎（同）宮川補
鈴木利十郎（東加茂）
岡崎千鞆（同）
大山勘太郎（同）鹿島補
山崎信一郎（同）山崎補
丸山久太郎（南設）阿部補
犬塚伊平（同）大原補
三好太一（同）
及部豊吉（同）
原田萬久（渥美）常置
豊田成章（八名）深井補
鈴木傳治（同）

明治十五年十月＝十七年五月

加藤一郎（碧海）
太田善四郎（幡豆）
木俣周平（同）深谷補
柴田正厚（同）常置

今井磯一郎（同）
松本但郎（同）
小松七九郎（同）鈴木補
宇野融平（同）岡崎補
村松六郎（北設）
原田甚八郎（同）山崎補
鈴木染治郎（同）丸山補
山本三太郎（寶飯）
中尾十郎（同）三好補
近田新造（同）及部補
山本八郎（同）常置
松井源右衛門（同）豊田補

宮川和一郎（同）今井補
二村十郎（同）松本補
小出權三郎（同）小松補
鹿島甚八郎（同）
山崎謙吉（北設）
阿部立喜（南設）
大原紋三郎（同）
平松清八郎（同）山本補
岩瀬長兵衛（同）中尾補
服部彌八（渥美）
深井九郎三郎（八名）
鈴木麟三（同）

岩田新六（同）
井上儀兵衛（同）
加藤善八郎（額田）
柴田宗十郎（同）柴田補

内藤魯一（同）
深谷半十郎（同）
近藤東右衛門（同）
大西三郎治（同）

太田七重郎（西加茂）　今井磯一郎（同）　杉田多十郎（同）　今井補
大山勘六郎（東加茂）　小池傳九郎（同）　大山補　小松七九郎（同）　小池補
岡崎千鞆（同）　小出權三郎（同）　岡崎補　原田甚八郎（北設）
今泉佐四郎（北設）　原田補　今泉佐五郎（同）　今泉補　古橋源六郎（同）
山崎信一郎（同）　古橋補　澤田淳平（同）　山崎補　橋木染治郎（南設）
松村重三郎（南設）　鈴木補　城所一郎（同）　松村補　夏目四郎吉（同）
丸山富三郎（同）　夏目補　山木三太郎（寶飯）　大林重三郎（同）
平松清八郎（寶飯）　近田新造（同）　平松補　福井佐平（渥美）
原田萬久（渥美）　郡副　山木八郎（同）　下山與平二（八名）
鈴木麟三（八名）

明治十七年五月＝十九年一月

加藤一郎（碧海）　常置　岩田新六（同）　早川龍介（同）
神谷小八郎（同）　早川補　太田善四郎（幡豆）　郡副　犬塚清藏（同）
井上儀兵衛（幡豆）　志賀喜代三郎（同）　杉浦吉右衛門（同）　太田補
井上儀兵衛（同）　杉浦補　深田三太夫（額田）　近藤東右衛門（同）　志賀補
柴田宗十郎（額田）　大西三郎治（同）　常置　杉田多十郎（西加茂）　深田補
今井磯一郎（西加茂）　宇野融平（東加茂）　小出權三郎（同）
大山勘六郎（東加茂）　小出補　山崎信一郎（北設）　原田甚八郎（同）　山崎補

深田淳平（北設）　丸山富三郎（南設）　鈴木光三郎（同）
鈴木謙次郎（南設）　鈴木補　山木三太郎（寶飯）　大林重三郎（同）
岩瀨長兵衛（寶飯）　福井佐平（渥美）　富田良穂（同）
山木八郎（渥美）　下山與平二（八名）　鈴木麟三（同）　郡副

明治十九年一月＝二十一年一月

岩間新右衛門（碧海）　加藤一郎（同）　岩間補　鍋田恒雄（同）
神谷小八郎（同）　犬塚清藏（幡豆）　井上儀兵衛（同）
深谷半十郎（幡豆）　常置　深田三太夫（額田）　近藤東右衛門（同）
大西三郎治（額田）　杉田多十郎（西加茂）　今井磯一郎（同）　常置
宇野融平（東加茂）　鈴木萬五郎（同）　鈴木利十郎（同）　鈴木補
原田甚八郎（北設）　澤田淳平（同）　城所一郎（南設）
鈴木謙次郎（南設）　山木三太郎（寶飯）　加藤六藏（同）
岩瀨長兵衛（寶飯）　吉原祐太郎（渥美）　富田良穂（同）
原田萬久（渥美）　八名太郎左衛門（八名）　鈴木麟三（同）　郡議長

明治二十一年一月＝二十三年四月

加藤一郎（碧海）　鍋田恒雄（同）　內藤魯一（同）　縣議長
太田善四郎（幡豆）　石川猪太郎（同）　尾崎潤平（同）
深谷半十郎（同）　深田三太夫（額田）　加藤善八郎（同）　深田補

小野權右衛門（額田）加藤補
大西三郎治（同）
柴田東八郎（東加茂）
深見壯右衛門（同）鈴木補
澤田淳平（北設）
山本三太郎（寶飯）
及部豊吉（寶飯）中尾補
原田萬久（渥美）

明治二十三年四月＝二十五年四月

近藤林（碧海）
岩田新六（同）早川補
太田善四郎（幡豆）
深谷半十郎（同）
大西三郎治（額田）
本多松三郎（西加茂）松本補
內藤竹次郎（東加茂）
原田甚八郎（北設）
原田新三郎（南設）

柴田正厚（同）小野補
杉田多十郎（西加茂）
鈴木利十郎（同）
宇野八治郎（同）深見補
城所一郎（南設）
加藤六藏（同）
吉原祐太郎（渥美）
八名太郎左衛門（八名）

加藤新右衛門（同）近藤補
太田作兵衛（同）岩田補
尾崎潤平（同）
柴田正厚（額田）
福岡精一（西加茂）
篠田六藏（同）本多補
村松壽之助（北設）
丸山富三郎（寶飯）
山本三太郎（寶飯）

近藤東右衛門（同）
松本但郎（同）
鈴木萬五郎（同）鈴木補
村松壽之助（北設）
丸山富三郎（同）
中尾十郎（同）
高和義吉（同）
鈴木鱗三（同）郡議長、常置

早川龍介（同）郡副
內藤魯一（同）縣議長
井上儀兵衛（同）尾崎補
近藤東右衛門（同）
松本但郎（同）
柴郎東八郎（東加茂）
後藤治郎八（北設）村松補
城所一郎（同）丸山補、常置
加藤六藏（寶飯）

岩瀨長兵衛（寶飯）加藤補
高和義吉（渥美）
後藤丑藏（八名）田中補

明治二十五年四月＝二十五年十月

加藤新右衛門（碧海）
太田善四郎（幡豆）
柴田正厚（額田）
福岡精一（西加茂）
內藤竹次郎（東加茂）
原田甚八郎（北設）
山本三太郎（寶飯）
遊佐發（渥美）
山田健次（同）後藤補

明治二十五年十月＝二十七年十月

深見太郎右衛門（碧海）
酒井宇右衛門（同）磯貝補
鈴木友治郎（幡豆）
蒲野錠平（西加茂）

及部豊吉（同）
後藤文一郎（同）
鈴木鱗三（八名）

太田佐兵衛（同）
鈴木友治郎（同）
近藤東右衛門（同）
浦野錠平（同）
岡崎義章（同）內藤補
城所一郎（南設）
岩瀨長兵衛（同）
高和義吉（同）常置
後藤丑藏（八名）

鍋田恒雄（同）
太田善四郎（幡豆）縣參
大西三郎治（額田）縣參
柴田東八郎（東加茂）

遊佐發（渥美）
田中濱吉（八名）
加藤桂（同）鈴木補

內藤魯一（同）縣議長
深谷半十郎（同）
大西三郎治（同）郡副
柴田東八郎（東加茂）
後藤治郎八（北設）
原田新三郎（同）
都築源右衛門（同）
後藤文一郎（同）
鈴木傳治（八名）

磯貝康太郎（同）
德倉六兵衛（同）太田補
近藤東右衛門（同）
原田甚八郎（北設）

原田紋右衛門（南設）　山本三太郎（寶飯）縣參　加藤六藏（同）山本補
岩瀨長兵衛（八名）　三浦碧水（渥美）　山本健（同）三浦補
高和義吉（渥美）　吉原祐太郎　赤川要助（八名）

明治二十七年十月＝二十九年十月

深見太郎右衛門（碧海）　鍋田恒雄（同）　酒井宇右衛門（同）
德倉六兵衛（幡豆）　太田善四郎（同）德倉補　鈴木友次郎（幡豆）
野村榮喜知（額田）　近藤東右衛門（同）　浦野錠平（西加茂）
安藤學（東加茂）　原田甚八郎（北設）　後藤治郎八（同）原田補
佐々木增吉（北設）後藤補　丸山彌右衛門（南設）　加藤六藏（寶飯）
岩瀨長兵衛（寶飯）　三浦碧水（渥美）　山本健（同）
吉原祐太郎（渥美）　赤川要助（八名）

明治二十九年十月＝三十一年十月

原田高敏（碧海）　鍋田恒雄（同）　酒井宇右衛門（同）縣參
太田善四郎（幡豆）　鈴木友次郎（同）　中村平左衛門（同）鈴木補
三浦源助（同）中村補　近藤東右衛門（同）　野村榮喜知（同）
浦野錠平（西加茂）　原田重助（西加茂）　安藤學（東加茂）
佐々木增吉（北設）　丸山彌右衛門（南設）　加藤六藏（寶飯）
畑田新作（寶飯）加藤補　岩瀨長兵衛（同）縣參　三浦碧水（渥美）

山本　健（渥美）　加藤八五郎（同）山本補　吉原祐太郎（同）
淺見瀧助（八名）

明治三十一年十月＝三十二年九月

原田高敏（碧海）　榊原吉右衛門（同）　鍋田恒雄（同）
太田善四郎（幡豆）　三浦源助（同）　足立信次郎（額田）
近藤東右衛門（額田）縣副　柴田房吉（西加茂）　安藤新八（東加茂）
金田治平（北設）　丸山久次郎（南設）　畑田新作（寶飯）
鈴木太郎作（寶飯）　渡會喜十郎（渥美）　加藤八五郎（渥美）縣參
吉原祐太郎（渥美）　淺見瀧助（八名）

明治三十二年九月改選

內藤魯一（碧海）縣議長　早川啓次郎（同）內藤補　榊原吉右衛門（同）
鍋田恒雄（同）　太田善四郎（幡豆）　德倉六兵衛（同）太田補
鈴木友治郎（幡豆）郡參　名倉庫吉（同）鈴木補　足立信次郎（額田）郡參
手島半次郎（額田）　鈴木岩吉（同）手島補　大岩勇夫（西加茂）
大山保（東加茂）　鱸重威（同）大山補　古橋今四郎（北設）
關谷泰（北設）古橋補　丸山久次郎（南設）　畑田新作（寶飯）
小野泰司（寶飯）　福井佐平（渥美）　大口喜六（同）
吉原祐太郎（同）郡參　鈴木麟三（八名）郡副

明治三十六年九月改選

長谷川竹次郎（碧海）　浅井啓十（同）　岡田菊次郎（同）
名倉庫吉（幡豆）　徳倉六兵衛（同）郡參　鈴木岩吉（額田）
野村榮喜知（額田）　今井磯一郎（西加茂）　松本光三（同）今井補
大山鉉九郎（東加茂）　片桐保太郎（北設）　小野田義緒（南設）
武田賢治（寶飯）郡參　杉浦兵吉（寶飯）　遠藤安太郎（渥美）
大口喜六（渥美）郡議長　吉原祐太郎（同）　後藤喜作（八名）

明治四十年九月改選

高野松次郎（碧海）　足立信次郎（額田）　青木百本（北設）
中西廣三郎（寶飯）　徳倉佐太郎（碧海）　吉原祐太郎（渥美）
白井九一郎（寶飯）　松本光三（西加茂）　太田善四郎（幡豆）郡議長
森作吉（渥美）　近藤重三郎（額田）　名倉庫吉（幡豆）
岡田菊次郎（碧海）郡參　池田至三郎（南設）　横田善十郎（豊橋）
安藤眞一郎（東加茂）　後藤庄五郎（八名）郡參　村上忠淨（碧海）徳倉補
新美新十郎（額田）近藤補

明治四十四年九月改選

三浦源助（幡豆）　宇野專一郎（東加茂）　山口猪輔（八名）
福谷元治（豊橋）　神谷徹（碧海）　今泉辰治郎（南設）

加藤米太郎（渥美）郡參　近藤壽市郎（渥美）　足立信次郎（額田）
佐々木信（北設）　徳倉作太郎（幡豆）　金原爲九郎（同）郡議長
宇佐美一夫（西加茂）　鈴木藤作（碧海）　島田六郎（寶飯）
高橋源吉（額田）郡參　磯部榮吾（碧海）　内藤茂樹（東加茂）宇野補
鈴木均平（幡豆）三浦補

大正四年九月改選

榊原辨吾（豊橋）　今井茂四郎（西加茂）郡議長　杉本庄平（碧海）郡參
赤川要助（八名）郡參　磯田伊三郎（渥美）　内藤茂樹（東加茂）
山内元平（渥美）　磯部榮吉（碧海）郡參　岡田菊次郎（同）
榊原新一郎（幡豆）　天野宗吉（額田）　手島鍬司（額田）郡議長
武藤代三郎（寶飯）　武田賢治（寶飯）郡參　伊藤重次郎（渥美）郡參
望月喜平治（南設）郡參　金田治平（北設）　鈴木均平（幡豆）郡參
小林作次郎（額田）天野補　後藤丑藏（八名）赤川補　神谷穂作（碧海）磯部補
神谷八郎（碧海）岡田補　杉浦幸吉（幡豆）榊原補　杉浦兵吉（寶飯）武藤補

大正八年九月改選

岡田菊次郎（碧海）　神谷穂作（同）郡參　眞野丈（同）郡參
神谷八郎（碧海）郡議長　森七三郎（岡崎）　鶴田督亮（額田）郡參
柴田房吉（西加茂）郡參　深見林右衛門（東加茂）郡參　榊原新一郎（幡豆）

深谷太助（幡豆）郡參　山口祐藏（寶飯）郡參　舞田壽三郎（同）
磯田伊三郎（渥美）郡參　鈴木辰藏（同）郡參　高橋小十郎（豊橋）
鈴木五六（豊橋）郡議長　加藤安太郎（北設）郡參　佐宗九一（南設）郡參
内藤才治郎（八名）　加藤六藏（寶飯）舞田補

大正十二年九月改選

鈴木五六（豊橋）連帶議長　小山信（同）　竹内京治（岡崎）
大野一造（碧海）郡參　岡田菊次郎（同）郡參　鈴木庄五郎（同）郡參
稲垣一郎（幡豆）郡參　榊原新一郎（同）連帶副　荻野與助（額田）
浦野謙朗（西加茂）　加藤庄三郎（東加茂）郡參　關谷守男（北設）郡參
山内五壽雄（南設）　青山安五郎（寶飯）郡參　山口祐藏（同）
近藤壽市郎（渥美）　小林峯松（八名）郡參　廣中泰介（渥美）
渡邊釼吉（西加茂）浦野補、郡參　鈴木辰藏（渥美）廣中補、郡參

昭和二年九月改選

小山信（豊橋）　菅野經三郎（岡崎）　岡田菊次郎（碧海）
大野一造（碧海）郡議長　千葉蝶二（幡豆）　榊原新一郎（幡豆）
伊野鯉之助（額田）　本多鋼吉（西加茂）郡參　加藤庄三郎（東加茂）郡參
熊谷皓平（北設）　淺井豊一郎（南設）郡參　北河丈吉（寶飯）郡參
青山安太郎（寶飯）　伊藤重次郎（渥美）　近藤壽市郎（同）

加藤正衛（八名）郡參　榊原辨吾（豊橋）鈴木補　河合孜郎（豊橋）榊原補
大場恒次郎（豊橋）小山補

昭和六年九月改選

神戸小三郎（豊橋）　河合孜郎（豊橋）　大野一造（碧海）　岡田菊次郎（碧海）
永田安太郎（碧海）　大見爲次（同）　稲垣一郎（幡豆）　長谷正春（同）
宇野銀平（東加茂）　本多鋼治（西加茂）　築瀨民松郎（額田）　佐宗九一（南設）
佐々木富三郎（北設）　加藤正衛（八名）　鈴木亀藏（寶飯）　北河丈吉（寶飯）
伊藤重次郎（渥美）　近藤壽市郎（同）　須藤實（名古屋）　野口令吉（同）
梅村清光（名古屋）　安藤悅太郎（同）　橋本金一（同）　安藤七郎（同）
奥村鐵三（同）　宮地太市（同）　河村愛治（同）　石黑幸市（同）
大澤鶴三（同）　村山爲章（同）　市野德太郎（同）　桑山仙次郎（同）
加藤甫（同）　淺井瀨逸（同）　山崎常吉（同）　太鹿由太郎（同）
近藤新助（同）　服部崎市（同）　神戸小三郎（豊橋）　河合孜郎（豊橋）
千賀康治（岡崎）　菅野經三郎（同）　吉田萬次（一宮）　水野憲吾（瀨戸）
外山眞太郎（愛知）　神戸眞（東春日井）　樋口善衛門（同）　堀場鈴吉（西春日井）
野田正昇（丹羽）　藤田鎌吉（同）　小澤富三郎（葉栗）　渡邊玉三郎（中島）
山田善一（中島）　中村新次郎（海部）　兒玉桝吉（同）　内藤守正（同）
安藤梅吉（知多）　磯部陸治（同）　森田久次郎（同）　橋本鐐太郎（同）

大野一造（碧海）　岡田菊次郎（同）　永田安太郎（名古屋）　大見爲次（碧海）
稲垣一郎（幡豆）　長谷正春（幡豆）　簗瀬民松郎（額田）　本田銅治（西加茂）
宇野銀平（東加茂）　佐々木富三郎（北設樂）　佐宗九一（南設樂）　鈴木亀藏（寶飯）
北河丈吉（寶飯）　伊藤重次郎（渥美）　近藤壽市郎（同）　加藤正衛（名古屋）
尾崎幸助（寶飯）　大竹藤知（渥美）　森林右工門（一宮）　熊澤彦三郎（名古屋）
兒玉桝吉（海部）　熊谷皓平（北設樂）　山田務（名古屋）　高田勘三（同）
野村三郎（愛知）　篠田信一（名古屋）

昭和十年九月二十五日選擧

安藤七郎（名古屋）　石黒幸市（同）　辻亀一（同）　小田莊二（同）
田中政友（同）　服部崎市（名古屋）　大澤鶴三（同）　榊原孫太郎（同）
山根虎治（同）　野口令吉（同）　奥村鐵三（同）　橋本金一（同）
加藤一夫（同）　宮地太市（同）　市野德太郎（同）　山田務（同）
須藤實（同）　近藤新助（同）　鈴村健（名古屋）　篠田信一（同）
伊藤銀之助（同）　横田忍（豊橋）　大澤松治郎（同）　大場恒治郎（同）
杉山伊佐雄（岡崎）　吉田萬次（一宮）　水野憲吾（瀬戸）　野村三郎（愛知）
樋口善右衛門（東春日井）　神戸眞（同）　堀場鈴吉（西春日井）　吉原治郎（丹羽）
野田正昇（丹羽）　川井由廣（葉栗）　渡邊玉三郎（中島）　山田善一（同）
中村新次郎（海部）　内藤守正（同）　兒玉柳吉（同）　安藤梅吉（知多）

森田久次郎（知多）　橋本鐐太郎（同）　磯部陸治（同）　大野一造（碧海）
岡田菊次郎（碧海）　氷田安太郎（名古屋）　大見爲次（碧海）　稲垣一郎（幡豆）
太田贊平（幡豆）　伊野鯉之助（額田）　本多鋼治（西加茂）　加藤庄三郎（東加茂）
原田仙二郎（豊橋）　佐宗九一（南設樂）　加藤六藏（寶飯）　尾崎幸助（同）
伊藤重次郎（渥美）　加藤正衛（名古屋）　酒井五郎吉（知多）　名倉乙治（名古屋）
杉村彰（中島）　山内庫三郎（同）　松浦淺吉（丹羽）　青樹堯爽（海部）
大谷政夫（寶飯）　大鹿由太郎（名古屋）　中島常五郎（同）　安達英一（東春日井）
竹中七郎（碧海）　森淺治郎（同）　千賀康治（岡崎）　兒玉柳吉（海部）
鈴木亀藏（寶飯）　湯流彦治郎（西春日井）　中村壽一（西加茂）　熊谷武男（北設樂）
鈴村金一（名古屋）　坂部亀太郎（幡豆）

昭和十四年九月二十五日選擧

横井太郎（名古屋）　横井亀吉（同）　辻亀一（同）　田中政友（同）
安藤七郎（同）　石黒幸市（同）　山内誠一（同）　赤座宮治郎（同）
山根虎治（同）　榊原孫太郎（同）　太田吉太郎（同）　奥村鐵三（同）
加藤一夫（同）　橋本金一（同）　野口令吉（同）　高橋銕五郎（同）
辻寛一（同）　近藤新助（同）　篠田信一（同）　佐藤太十郎（同）
吉田勝正（同）　鈴村金一（同）　伊藤甚八（同）　坪井研精（同）
大澤松治郎（豊橋）　大竹藤知（同）　横田忍（同）　太田光二（岡崎）

千賀康治（岡崎）　吉田萬治（一宮）　鈴木舜二（瀬戸）　酒井五郎吉（半田）
柴田直一（愛知）　神戸眞（東春日井）　藤田三郎（同）　牧野甚松（西春日井）
野田正昇（丹羽）　原田鐵藏（同）　川井由廣（葉栗）　伊藤半逸（中島）
山内庫三郎（中島）　兒玉柳吉（海部）　鶴見千代太郎（同）　青木堯然（同）
安藤與三（知多）　蟹江一太郎（同）　橋本錄太郎（同）　永田安太郎（名古屋）
岡田菊次郎（碧海）　竹中七郎（同）　大見爲次（同）　坂部亀太郎（幡豆）
尾崎竹次郎（幡豆）　服部廉平（額田）　本多綱治（西加茂）　加藤庄三郎（東加茂）
田邊秀世（北設樂）　佐宗九一（南設樂）　鈴木亀藏（寶飯）　逸見彦太郎（同）
林勝太郎（渥美）　原理平治（八名）　吉原一之（海部）

昭和十六年八月二十五日印刷
昭和十六年八月三十一日發行

〔定價金五圓〕

編者　名古屋市中區東陽町五丁目　鈴木清節
發行者　豐橋市草間町字東郷五十番地　大竹藤知
印刷者　豐橋市西八町八六ノ六番地　藤田庄太郎
印刷所　豐橋市西八町八六ノ六番地　藤田印刷所

不許復製

發行所　豐橋市魚町二五五ノ二　三河憲政史料刊行會
發賣所　豐橋市鍛冶町三十九番地　悠悠社

127
13

終